

早稻田學報

大正八年 第貳百八十七號 一月十日發行 一月十日發行

本號目次

大正八年を迎ふ

平沼學長

意見

新年祝詞交換會 平沼學長就任認可 教授講師增聘 評議員囑託 定期維持員會 定日理事會 法科教授講師協議會 文學科教授講師協議會 研究室に關する相談會 科外講義 法科懸賞討論會 大正七年度中等教員免許狀受領者 専門部の學年繰上 學費引上 大學部商科其他授業終了及學期試驗 理工科授業終了及學期試驗 高等豫科授業終了及學期試驗 冬季休校 冬季休校に付一般事務の閉止及開始 贊助會贊助申込盛況 松平理事の新瀕行 應用化學科主任送迎會 早稻田叢誌發刊

校友會報

校友動靜 大隈侯爵紀念品贈呈資金申込芳名 維持費釀出人名

學生會合

經濟學會の東京商業會議所見學 史學會講演會 史學會會員の史跡見學旅行 史學會の集鴨病院見學 六機會 岡山出身學生會 群馬縣人會 瀧原會 靜坐會成る 史學會例會 研究講演會 埼玉縣人會

雜報

永樂俱樂部消息 大隈總長の國府津行 杉山早稻田實業學校長の辭任 宇都宮講師の歐米視察 久松講師夫人の逝去 社會政策學會大會 平沼學長の講演 バンクバー在住邦人觀光團の來訪

通信

米國フィラデルフィアより 米國便り 米國ハーバード大學より

東京牛込

早稻田大學校友會

電話番三五〇〇番

東京總店 八八九六番

意見

大正八年を迎ふ

學長 法學博士 平沼 淑郎

大正八年を迎ふるに當つて、茲に一言を述ぶる、回顧すれば、我が早稲田大學が専門學校として成立を告げしより以來、茲に三十有六年の星霜を経由した、今日に至るまで當局者の辛苦經營した所の功績は歴然として各方面に顯はれて居る、設立者を始めとして、經營の局に當つたる人、教授の任に膺つたる人、事務に執掌したる人、是れ等の人々に對して深き一感謝の念を禁ずるを得ないのである、然れども我が早稲田大學の前途に就いて觀察を下すときは、尙幾多の難關を突破しなければならぬ、今後層一層の奮勵努力を要する、

我が大學は専門學校として成立を告げて、後ち早稲田大學と改稱したのであつて、爾來今日に至るまで大學の名稱を冠して居るけれども、法令の上より之れを觀るときは、専門學校令の支配に屬して居つて、眞の大學とは成つて居ないのである、

我が國に於いては、大學に關する法令は帝國大學令があつて、官立大學を認めて居つたけれども、其の中にも私立大學を包容しては居らなかつたのである、且學者教育家の間に於いても容易に私立大學の成立を認容しなかつたのである、此の事實は一面より觀察を下すときは、相當の理由がある、是れ我が國の大學の歴史を見れば明かなる所である、我が國の大學の始祖とも稱すべき者は東京帝國大

學であるが、其の前身は徳川幕府時代に於ける審書取調所である、審書取調所が其の後に名稱を改めて洋書取調所となつて、是れが又開成所後に開成學校と成つた、開成學校は護持院が原即ち唯今の東京外國語學校學士會事務所等の所在地に校舍を建築して授業を開始したのである、又全國に五個の英語學校を設立して、これより出でた所の俊秀が開成學校に入ることになつて居つたのであるが、漸次廢止せらるることになつた、東京英語學校は今の一橋から高等商業學校の前を通つて突當つた所の榎原式部少輔の屋敷跡に在つたが、後に名稱を改めて東京大學豫備門となつた、即ち今の第一高等學校の前身である、この豫備門が名稱の改革と共に開成學校の校舍内に移轉したのであるが、之れと同時に開成學校は名を改めて東京大學法理文三學部となつた、而して從來和泉橋附近にあつた醫學部は本郷にある今の醫科大學の處に移つて居つて、東京大學醫學部と稱した、其の外に工部省が設立して居つた所の工部大學校と云ふ者があつた、今の虎の門の女學校が其の校舍であつた、是れも後に東京大學に合併した、それから司法省の設立に係つて居つた所の法律學校も亦東京大學の法學部に合一せられた、茲に於いて、日本の大學は唯一校となつたのであつて、而して明治十八年帝國大學令の發布と共に今日の東京帝國大學が成立したのである、

維新以來明治十年代に至るまでの状態を觀ると、大學に入學する所の學生の數は決して多くはなかつた、却つて政府が貢進生を各藩から徵集したり、或は給費、貸費の制度を設けて、入學を獎勵したものである、斯くの如き情勢であつたからして、東京に唯一つの大學を置いて毫も不足を感じなかつたのであつた、しかしながら是れは我が文化の未だ普及しなかつた結果であつて、學術に對する社會の思想が頗る幼稚であつた證據である、然るに時運の進歩は向學の觀念を助成し、高等なる教育を受けんと欲する者年一年にその數を増加して來た、茲に於いてか唯一の官立大學のみを以てしては到底需要を充足するを得ざるに至つた、その結果は官立大學の増設と私立學校の隆盛とを促したのである、

私立學校の中に就いても、慶應義塾は既に明治以前より成立して居つたものである、其の設立者たる福澤先生の努力は今日に至るまで長へに世人の欽仰して居る所である、先生と相並んで洋學の泰斗と仰がれた所の箕作秋坪先生の設立せられた三又學舎又は中村敬宇先生の經營に成つた同人社があつたが、此の二校は中道にして其の業を廢して、獨り慶應義塾のみが存續して且隆昌の運に向つた、それから明治の十年代に至つて我が大隈侯爵が同志の士と相計つて早稲田大學の前身たる東京專門學校を設立せられたのである、而して其の後私立學校の設立年を逐うて盛んになつて來たのである、しかしながら私立學校は其の經營設備共に不完全であつて、到底官立の學校に拮抗することを得なかつた、是れは資金の不足と人物の拂底とが然らしめたのであつて、當時の社會状態より推して當然のことであつた、

かやうな状態であつたからして、私立學校は到底官立學校に匹敵するだけの資格を備へることを得なかつた、幾多の經驗を積み長年月の沿革を経た所の東京帝國大學の如きと、設立日淺く資金十分ならざる私立の學校と日と同じうして論ずべからざるものであつたことは蓋し止むを得なかつたのである、故に私立の學校が縱令高等なる教育を授けても、今日まで大學として認められなかつたのは當然のことである、其の間に議論を挟む餘地はない、然れども時勢の進歩は到底今日の状態に安んずることを許さなかつた、大學の教育を受けんと欲する者は日に其の數を増して、官立の高等教育機關は逐年その數を増加しつ、あるにも拘はらず、收容の力は決して十分でない、如何にしても私立の高等教育機關を以て其の缺陷を補はねばならぬ、是れと同時に私立學校中、漸次設備を整へ、資金を聊か豊かにした者が縱令少數なりとも存在するに至つたのである、

斯くなつて、高等なる私立學校が大學たるの資格を有するに至つたならば、法令上之れを認めて何の不可は無いのである、從來教育に關する調査會があつて、此の事に關して議論を闘はしたけれども、從來の因襲に因はれて容易に私立大學を認めなかつた、けれども時勢の進歩は長く因循姑息の策を行ふことを許さない、今回の臨時教育會議に於いては遂に私立大學を認むることになつた、即ち大學たるの資格を備ふる者は官立の大學と相對して眞の大學たることを許すといふ方針を以て決議したのである、此の精神に基いて定められたる大學令案は樞密院の議に附せられ、爾來幾數十回の審議を経て可決を見るに至つた、其の結果が先日發布せられた大學令

である、然らば則ち我が早稲田大學も亦大學令の指定する大學の資格を備ふる以上は、専門學校令の支配を脱却して、新大學令に依れる新生命を得るに至るべきはである、

以上は唯法令の上から見た觀察である、然れども翻つて内容實質に就いて考慮を加ふべき餘地が多々ある、

抑、大學たる以上は第一に學術の研究が必要である、専門學校に於いて研究が不必要であるとは決して言はないけれども、専門學校は教授を本體とする、然るに大學に至つては教授と研究とが並び立たなければならぬ、大學は智識の淵源である、物質と言はず精神と言はず、社會の風潮を造り人心の歸嚮を指導する所の者は大學に於ける研究の結果が有力なる源泉とならなければならぬ、先般米國は獨逸に對して戰を宣した、其の目的は正義人道の爲に偏狭なるミリタリズム野蠻なるオートクラシーを倒すと云ふに在る、此の大方針は米國の輿論に由つて定つたのであるが、此の輿論は果して誰が作つたのであるか、大學である、大學の學者が盛んに宣戰を唱導して、是れが導火線となつて輿論を動かした結果が對獨宣戰となつたのである、是れに由つて之れを觀ても、眞の大學が社會の風潮を作るに大勢力のあるべきことは推測し得らる、であらう、

苟も大學が智識の淵源である以上は斯くなければならぬ、現今議論の喧しくなれる所の資本勞働調和論或はデモクラシーの問題の如きでも、どうしても大學に於いて學術的に之れを研究して、以て或は當路者の參考に資し、或は人心の向背を指導すること、ならなければならぬ、

ばならぬ、其の他物質界に於いても同様である、今日の産業の根本は學者の研究より出で、居らないものは殆ど無い、而して其の研究を爲す所の學者は十中八九大學に在る所の者である、

斯くの如く大學に於ける研究は必要であるけれども、此の研究を爲す所の學者に對して二つの考慮すべき事項がある、第一は研究機關の設備である、學者が如何に研究心に富んで居つても、機關が整備しなければ到底その用を爲すことを得ない、故に大學に於いては相當の機關を備へなければならぬ、第二に學者をして研究を重ねしむるに當つては其の優遇の問題が起る、如何に學者と雖も相當の待遇を受けなければ終身生命を研究に委ぬることを得ない、生命を委ぬることを得ない間は十分なる研究を爲すことを得ないのは争ふべからざることである、故に大學は學者の待遇に就いて慎重なる考慮を加へなければならぬ、

眞の大學を造るに當つては、一般經費を生ずべき資金の問題が今一つある、教育を施す所の學校が其の方針に適合する萬般の設備を要することは論ずるまでもない、大學も亦大學相當の設備大學相當の經費を要するのである、從來私立の學校は殆ど授業料のみを以て經費を支持したる者が少くないけれども、授業料のみに依つて一般經費を補填することは到底進歩發達を圖るべき所以の道でない、試みに官立大學を見て、決して授業料のみを以て全經費を支へては居らない、國民より納むる所の租税を割いて其の要部を補うて居る、授業料のみを以てしては到底大學相當の設備を爲すことを得ないのである、故に歐米の私立大學は授業料以外に種々の財源を有つて居る、或は富豪の義捐金或は校友の寄附金に依つて教育の發達を計つて居るのである、今日我が國の私立大學も到底授業料を以て唯一の財源とすることを得ない、斯くては大學としての進歩發達は期し難いのである、故に新大學令は相當の資金を備へしむることを法令中に明記して居る、我が早稲田大學も亦此の相當の資金を備へなければならぬ、所謂相當の資金の額は文部大臣の定むる所であらう、

今日我が國の私立大學も到底授業料を以て唯一の財源とすることを得ない、斯くては大學としての進歩發達は期し難いのである、故に新大學令は相當の資金を備へしむることを法令中に明記して居る、我が早稲田大學も亦此の相當の資金を備へなければならぬ、所謂相當の資金の額は文部大臣の定むる所であらう、

今日は所謂相當資金額の幾何なるかを精確に知ることを得ないけれども、大學の面目を維持する上から見ても、頗る多額を要することは明白なることである、此の資金を備へることは目前に迫つて居る難關であらうと思はれる、

早稲田大學に於いて今一つの難關は豫科の問題である、大學豫科は大體に於いて新高等學校令に據ることになつて居るのである、すると學級編成の改正其の他に於いて必要とする所の經營の額は今日よりも非常に増加することとなる、校舍の新築改築教員の備聘等は目前の急務である、之れに對しても非常の金を要する、是れ亦難關の一つであると謂はなければならぬ、

以上の如き難關がある、此の難關を突破しないと、眞の大學となることを得ないのである、之れに就いては江湖の同情又は校友諸君その他關係者の大なる奮發を要する、諺に一年の計は新年に成ると云ふ、今日大正八年を迎ふるに當り第一着に我が早稲田大學の關係者に對して、難關を突破するの覺悟を喚起して、之れに要する努力を促したいと思ふのである、之れを以て大正八年初頭の辭とする、

者に對して、難關を突破するの覺悟を喚起して、之れに要する努力を促したいと思ふのである、之れを以て大正八年初頭の辭とする、

校 報

●新年祝詞交換會 本年は特に教職員全體の申合せに依り一月元日午前正十時本部に參集相互新年の祝詞を交換し以て年賀回禮祝詞贈酬廢止の事に定め、定刻平沼學長を始め各理事幹事以下職員一同並に各教科長を始め教授講師一同本部應接室講師室及講師食堂の三處に會し、新年祝詞の間に芽出度壽詞を交換して散會せり。

●平沼學長就任認可 去十月九日付を以て出願し置きたる理事平沼淑郎氏學長就任の件、十一月廿七日付主務省の認可ありたり。

●教授講師増聘 今回左の教授講師を増聘し、頭書の學科擔任を囑託せり。

機械工學 教授 工學士 渡部寅次郎氏
應用化學 講師 工學士 兵藤 藤吉氏
物理化學 講師 理學士 富永 齋氏

●評議員囑託 茨城縣校友會より渡邊惣衛門氏を本大學評議員に選舉し來りたるに付去十二月十九日付を以て同氏に本大學評議員を囑託したり。

●定期維持員會 十二月十日午後二時定期維持員會を開きたり。

●日理事會 去十二月十九日午後二時定期理事會を開き、各理事出席協議する所あり。

本會を以て大正七年の納會として散會せり。
●法科教授講師協議會 十二月七日午後五時より永樂町永樂俱樂部に於いて開催。法科卒

業期繰上げの件其の他に就き協議する所ありたり。

●文、學、科、教、授、講、師、協、議、會、 去十二月二十日午後五時永樂町永樂俱樂部に於いて開催。文學科の教授關係事項に付協議する所ありて散會せり。

●研究室に關する相談會、 去十二月廿三日午後一時恩賜館會議室に於て開會。本學年度の研究者取極めに付協議する所ありて散會せり。

●科、外、講、義、 去十二月中一般學生の爲め左の科外講義を開催したり。

▲十二月三日(火曜)午後三時講堂に於て

國際聯盟論 法學博士 吉野 作造氏

▲十二月四日(水曜)午後二時講堂に於て

教育ある人士の七特徴 新聞科學長 ウォリアムス博士

博士は先づ正午大隈總長邸を訪ひ午餐の饗あり、後ち講堂に臨まれたり。

▲十二月六日(金)午後三時講堂に於て

米國婦人の智識的社會的及政治的活動 米國ウァーサル大學 カロライン、エ、天文學教授哲學博士 フアーネス女史

▲十二月九日(月曜)午後三時講堂に於て

米國社會に於ける大學の位置 講師 ドクトル、オウ、帆足理一郎氏

▲十二月十日(火曜)午後三時講堂に於て

米國參戰の政治的研究 講師 ドクトル、オウ、高橋 清吾氏

●法、科、懸、賞、討、論、會、 十一月三十日午後一時恩

賜館階段教室に於て開催。中村法科々長、寺尾教授、校友大橋誠一氏等列席。教授中村萬吉遊佐慶夫兩氏の出題に係る討論題

甲者に發狂せる一娘(丙)あり乙者は丙女の發狂者なることを知らず同女をして醜業を營ましむる目的を以て金千圓にて丙を買取らんことを甲に申込みたり甲之を諾し丙女の發狂者なることを告げざるのみならず却て其健全者なることを言明して該金圓を得て乙に丙女を引渡したり後數日にして乙は丙女の當初より發狂者なりしことを確知したり仍て乙は甲に對して丙女の引取を要求し且少くとも金千圓の損失を回復することを得るか

に就きて討論あり。後ち大橋校友中村教授各意見を述べ、最後に遊佐教授の批評あり。終つて左の討論優秀者に賞品の授與ありて閉會せり。

- 一等賞 專法二 高井 忠夫
- 二等賞 同三 外岡 茂十郎
- 三等賞 大法三 馬場 友義
- 四等賞 專法三 寺尾 卯之助
- 同上 同三 高 久 清
- 五等賞 大法三 芥 潔
- 同上 專法一 山 根 金 市
- 六等賞 大法三 行 天 良 一
- 七等賞 專法一 鎌 田 貞 一

●大正七年度中等教員免許狀受領者 大正七年度中等教員免許狀を下附せられたる者左の如し。

- 哲學科 青柳 宗平
- 修身科 久野 洵之助
- 教育科 今西 國三郎

- 修身科 此崎 市郎
- 教育科 香原 一勢
- 修身科 石川 紹舊
- 英文學科 柳 田 泉
- 英語科 吉田 甲子太郎
- 同 竹内 秀雄
- 同 生方 徹誠
- 同 木村 瑜一郎
- 同 大槻 憲二
- 同 森 泰 吉
- 同 西村 鎮彦
- 同 小寺 融吉
- 同 志 野 豐
- 史學及社會學科 潮沼 寬二
- 同 松田 治一郎
- 同 柴野 秀夫
- 同 若森 民五郎
- 同 山口 鏡水
- 國語漢文科 青木 益太郎
- 漢文科 岡田 甚四郎
- 同 倉富 堅吾
- 同 妹尾 富三郎
- 同 樋口 清

- 國語及漢文科 勝間 義昌
- 同 澁谷 丈夫
- 同 李代 公平
- 同 重松 善一
- 同 野中 新平
- 同 武本 寅五郎
- 同 飯岡 岩太郎
- 同 宇治 田種雄
- 同 隈部 義人
- 同 佐野 格之介
- 同 杉浦 智郎
- 英語科 井上 宗四郎
- 同 根 岸 一
- 同 白井 文彦
- 同 佐々木 眞
- 同 五月 女傳一
- 同 藤井 啓一
- 同 長坂 嘉一郎
- 同 藤崎 倭一
- 同 中村 岩夫
- 同 水 口 范
- 同 原 長 助
- 同 村杉 清一
- 同 島 田 祥
- 同 井上 幸次郎

●專門部の學年繰上、從來專門部政治經濟科及法律科の學年は九月開始の處、今回學則を改め大學部及高等豫科同様毎年四月學年を開始する事となりたり。

●學費引上、時局の趨勢と學界の必要上一般學生の學費年額金五圓を引上げ本月より之を

實行納付せしむる事となりたり。

●大學部商科其他授業終了及學期試驗、大學部商科、高等師範部第二部及高等師範部豫科何れも十二月十四日授業終了、商科は同十六日より廿一日まで、高等師範部第二部は同十六日より廿三日まで第一學期試驗、高等師範部豫科は同十六日より廿三日まで第二學期試驗を施行したり。

●理工科の授業終了及學期試驗、大學部理工科各學科は十二月十四日授業終了、同十八日より廿三日まで第一學期試驗を施行したり。

●高等豫科の授業終了及學期試驗、高等豫科各部は十二月七日授業終了、同十一日より廿一日まで學期試驗を施行したり。

●冬季休校、大正七年十二月廿一日(土)より大正八年一月十日(金)まで冬季休校せり。

●冬季休校に付一般事務の閉止及開始、前項冬季休校に付一般事務は十二月廿六日閉止、一月九日開始の事とせり。

●贊助會贊助申込盛況

本大學が其經濟的基礎を確立せんが爲め曩に贊助會を設けて、普く校友諸君を始め滿天下の援助を仰ぐべく懇請する所ありたるに對し、大方の同情翕然として起り、申込書日に相繼ぐの盛況を呈したるは深く本大學の光榮とする所にして、以後順次其芳名を録して感謝の意を表せんとす。

- 申込口數 府縣 氏 名
- 一、一〇〇口 東京 伯爵 松平 頼壽殿
- 一、五〇口 同 男爵 澁澤 榮一殿
- 一、五〇口 同 村井 吉兵衛殿

一、	五〇口	神奈川	原 富太郎殿	一、	一〇口	東京	篠原 彌吉殿	一、	五口	新潟	松井 群治殿	一、	二口	巖手	並木 幾彌殿
一、	五〇口	東京	昆田 文次郎殿	一、	一〇口	新潟	渡邊 清次郎殿	一、	五口	滿洲	石田 武亥殿	一、	二口	福島	鈴木善次郎殿
一、	五〇口	同	増田 義一殿	一、	一〇口	東京	後藤 信次殿	一、	五口	大阪	岡谷 喜三郎殿	一、	二口	大阪	西田 俊一殿
一、	五〇口	同	内藤 久寛殿	一、	一〇口	同	佐藤 甚九郎殿	一、	五口	同	串本 友三郎殿	一、	二口	兵庫	友野 祐三郎殿
一、	三〇口	同	杉田 駿殿	一、	一〇口	同	中川 末吉殿	一、	五口	群馬	松澤 知司殿	一、	二口	大分	永田 誠一殿
一、	二五口	同	山田 英太郎殿	一、	一〇口	同	鹽澤 昌貞殿	一、	五口	支那	鈴木 新吾殿	一、	二口	東京	兵頭 直明殿
一、	二〇口	同	浦邊 襄夫殿	一、	一〇口	同	淺野 應輔殿	一、	三口	東京	澤口 育三殿	一、	二口	新潟	櫻井 市作殿
一、	二〇口	同	渡邊 亨殿	一、	一〇口	新潟	廣井 一殿	一、	三口	同	鈴木 佐平次殿	一、	二口	同	安藤 文祐殿
一、	二〇口	同	齋藤 和太郎殿	一、	一〇口	同	鍵富 三作殿	一、	三口	埼玉	酒卷 景一殿	一、	二口	同	舟崎 仁一殿
一、	二〇口	石川	横山 俊二郎殿	一、	一〇口	大阪	莊保 勝藏殿	一、	三口	朝鮮	楠田 弁三郎殿	一、	二口	同	石塚 三郎殿
一、	二〇口	東京	黒田 善太郎殿	一、	一〇口	東京	武田 鼎一殿	一、	三口	東京	津田 和助殿	一、	二口	同	荒川 謹二殿
一、	二〇口	同	村井 五郎殿	一、	一〇口	同	齋藤 義一殿	一、	三口	新潟	松木 弘殿	一、	二口	同	笹川 加津惠殿
一、	二〇口	同	田中 四郎左衛門殿	一、	一〇口	同	荻野 元太郎殿	一、	三口	同	福島 甲子三殿	一、	二口	同	本田 格平殿
一、	二〇口	同	前島 彌殿	一、	一〇口	同	杉野 健治殿	一、	三口	同	櫻井 孝治殿	一、	二口	北海道	中村 喜藏殿
一、	二〇口	同	高田 軍三殿	一、	五口	京都	谷村 一太郎殿	一、	三口	福井	野村 勘左衛門殿	一、	二口	上海	鶴原 梅次郎殿
一、	二〇口	新潟	久須美 東馬殿	一、	五口	東京	河内 富次郎殿	一、	三口	滿洲	獅子内 謹一郎殿	一、	二口	富山	松村 謙三殿
一、	一五口	東京	池田 龍一殿	一、	五口	高知	岡崎 賢次殿	一、	三口	大阪	川井 又六殿	一、	二口	東京	伊藤 富藏殿
一、	一五口	同	上原 鹿造殿	一、	五口	東京	名取 夏司殿	一、	三口	北海道	花川 八藏殿	一、	二口	同	黒川 兼三郎殿
一、	一五口	同	石井 政吉殿	一、	五口	宮城	稻垣 泰之助殿	一、	三口	東京	森田 卓爾殿	一、	二口	岡山	金光 國開殿
一、	一五口	同	高田 早苗殿	一、	五口	東京	都倉 義一殿	一、	三口	東京	原田 駒之助殿	一、	二口	愛知	稻垣 升一郎殿
一、	一五口	同	大隈 信常殿	一、	五口	同	埴原 正直殿	一、	三口	同	大橋 誠一殿	一、	二口	東京	新井 智三郎殿
一、	一五口	同	平沼 淑郎殿	一、	五口	同	井口 誠一殿	一、	三口	同	難波 理一郎殿	一、	二口	大阪	高木 契蘭殿
一、	一五口	同	田中 穂積殿	一、	五口	同	松下 保次郎殿	一、	二口	同	園田 格殿	一、	二口	同	黒澤 昇治殿
一、	一〇口	同	宮川 鐵次郎殿	一、	五口	同	小林 林藏殿	一、	二口	同	多川 信治殿	一、	二口	東京	大鳥 居春三殿
一、	一〇口	同	山澤 俊夫殿	一、	五口	同	伴野 賢造殿	一、	二口	同	平野 英一郎殿	一、	二口	神奈川	木村 福藏殿
一、	一〇口	同	松山 忠二郎殿	一、	五口	同	三輪 善太郎殿	一、	二口	神奈川	能島 通明殿	一、	二口	上海	清水 金八殿
一、	一〇口	同	長澤 倉吉殿	一、	五口	同	石澤 愛三殿	一、	二口	東京	田中 傳太殿	一、	二口	新潟	覺張 半四郎殿
一、	一〇口	同	中野 勇平殿	一、	五口	静岡	青地 雄太郎殿	一、	二口	同	八木 辰守殿	一、	二口	同	正山 敏雄殿
一、	一〇口	同	飯田 新太郎殿	一、	五口	東京	岡田 猛熊殿	一、	二口	同	杉山 直吉殿	一、	二口	同	佐藤 德三郎殿
一、	一〇口	愛知	奥田 四郎殿	一、	五口	兵庫	秋山 忠直殿	一、	二口	同	永井 清志殿	一、	二口	兵庫	増田 稻三郎殿
一、	一〇口	東京	森 盛一郎殿	一、	五口	東京	坪内 雄藏殿	一、	二口	同	波津 久清殿	一、	二口	岡山	金光 三代太郎殿
一、	一〇口	同	羽田 智證殿	一、	五口	同	雨宮 治良殿	一、	二口	同	齋藤 彌彦殿	一、	二口	茨城	渡邊 眞之丞殿
一、	一〇口	同	中野 鐵平殿	一、	五口	宮城	安田 善造殿	一、	二口	同	藤田 惠吉殿	一、	二口	東京	瀧口 擔殿

一口	巖手	下斗米耕造殿	一口	長野	高江 幸彦殿	一口	神奈川	吉田 國二殿	一口	東京	松宮 三郎殿
一口	愛知	池田涼一郎殿	一口	神奈川	城井 三 殿	一口	岡山	大西 虎雄殿	一口	栃木	上野 豐雄殿
一口	同	宇田川清兵衛殿	一口	兵庫	丸山 肇殿	一口	兵庫	池島 誠三殿	一口	東京	中島 毅一殿
一口	同	大橋 敏郎殿	一口	東京	原田 雄門殿	一口	神奈川	千川 才作殿	一口	香川	入谷 哲平殿
一口	同	河野 仙吉殿	一口	千葉	齋藤 武殿	一口	同	館山 祐治殿	一口	愛媛	手島横三郎殿
一口	同	吉野 敬三殿	一口	群馬	林 庸太郎殿	一口	同	山口 重秋殿	一口	大阪	秋田貞太郎殿
一口	同	塚原滿一郎殿	一口	東京	山本 義之殿	一口	同	藤原 龍一殿	一口	新潟	山本 平吉殿
一口	同	佐治 敬吾殿	一口	新潟	安倍邦太郎殿	一口	同	佐藤新三郎殿	一口	香川	藤澤鹿太郎殿
一口	同	小澤 巖殿	一口	兵庫	岩田 有共殿	一口	同	中澤善右衛門殿	一口	北海道	坂東幸太郎殿
一口	同	平澤兵之助殿	一口	石川	石原辰之丞殿	一口	同	伊藤元次郎殿	一口	東京	氏家 正殿
一口	同	原 安三郎殿	一口	東京	宮川 庸三殿	一口	同	奥山 一雄殿	一口	新潟	多田隈弘道殿
一口	同	中野 實範殿	一口	神奈川	大谷 守次殿	一口	東京	長谷川謙一郎殿	一口	神奈川	齋木政太郎殿
一口	同	捧 亦七殿	一口	福島	筒井 磐雄殿	一口	福島	若松 修一殿	一口	東京	井上 武夫殿
一口	同	稻光 謹三殿	一口	東京	野村 俊一殿	一口	同	石津 美基殿	一口	千葉	椎名儀一郎殿
一口	同	桑田福太郎殿	一口	大阪	谷口 春雄殿	一口	東京	山路虎之助殿	一口	大阪	戸田 收殿
一口	同	大久保清志殿	一口	同	滿所信太郎殿	一口	神奈川	高橋 鈺吾殿	一口	山梨	飯野 清重殿
一口	同	大島 正一殿	一口	東京	六角宇太郎殿	一口	東京	山田 節殿	一口	東京	岩井 武雄殿
一口	同	石川 勝治殿	一口	神奈川	若松 精一殿	一口	愛知	白石 勝彦殿	一口	和歌山	西岡伊兵衛殿
一口	同	龜井 齋平殿	一口	同	大石 敬三殿	一口	山梨	細田 泰介殿	一口	同	岩崎慶次郎殿
一口	同	馬屋原仙一殿	一口	同	柿内 照康殿	一口	愛知	足立 清逸殿	一口	東京	片岡與七郎殿
一口	同	丸田喜一郎殿	一口	同	高島益之助殿	一口	同	松谷 久一殿	一口	同	館岡 幹殿
一口	同	生方 貞一殿	一口	同	吉川 利一殿	一口	神奈川	山崎 昌平殿	一口	秋田	本郷 良吉殿
一口	東京	大槻 音松殿	一口	同	青江 隆二殿	一口	東京	西山巳之助殿	一口	兵庫	冲 作治殿
一口	栃木	森下 國雄殿	一口	同	田澤 康民殿	一口	宮城	澁谷 桃二殿	一口	新潟	青木 信藏殿
一口	山形	正田 運猷殿	一口	同	服部 暢殿	一口	靜岡	國澤 能春殿	一口	北海道	勝浦 英一殿
一口	同	崎山刀太郎殿	一口	同	小形 青村殿	一口	神奈川	山口 堅吉殿	一口	神奈川	堀 英文殿
一口	同	石井 繁殿	一口	同	池上 芳周殿	一口	東京	堀田庄五郎殿	一口	新潟	金子 勇司殿
一口	同	松垣 新一殿	一口	同	盛田 秀平殿	一口	北海道	今里準太郎殿	一口	兵庫	石丸 英一殿
一口	東京	永田金三郎殿	一口	東京	小池 素康殿	一口	東京	田中 藤吉殿	一口	東京	平井 秀男殿
一口	栃木	内田卯三郎殿	一口	神奈川	澁川 正治殿	一口	滋賀	小林 民造殿	一口	兵庫	岸 平殿
一口	同	太神 壽吉殿	一口	同	井上 雅二殿	一口	東京	松本 茂雄殿	一口	大阪	增田仁三郎殿
一口	東京	崔益 俊殿	一口	東京	兎耳山 毅殿	一口	神奈川	武南 倉造殿	一口	山形	齋藤 登作殿
一口	朝鮮	渡邊 五郎殿	一口	同	井上 雅二殿	一口	東京	松本 茂雄殿	一口	東京	田邊 感善殿

- 一、京都 伊藤 申殿
 - 一、大阪 安部 一男殿
 - 一、青森 伊藤 重雄殿
 - 一、長崎 澁谷 丈夫殿
 - 一、大阪 谷本多喜治殿
 - 一、同 谷川 湊殿
 - 一、同 小笠原幸彦殿
 - 一、東京 廣田 光威殿
 - 一、静岡 大澤 逸策殿
 - 一、福岡 富永 貫一殿
 - 一、鳥取 稻田 元長殿
- (以後次號)

●松平理事の新潟行

新潟縣校友諸氏十二月十三日新潟市鍋茶屋に於て忘年會を兼ね臨時校友大會開催に付、之れに出席の爲め理事松平伯爵、難波贊助會幹事を隨へ、十三日朝新潟驛着、長岡驛まで出迎へられたる校友石塚三郎、松木弘兩氏と共に多數校友諸氏に迎へられ、校友久須美代議士の鄭重なる招宴に列し、同夜前記校友大會に臨まる。幹事安藤文祐氏開會の辭に次いで、松平理事より這回發表せられたる本大學贊助會設置の理由並に其緊要止むを得ずして校友諸氏の愛校心に訴ふるの外なき所以に就いて熱誠を披瀝して繰々力説せられ、同席諸氏の熱心なる贊同を得、全員舉つて縣下の應募に努力すべき申合せあり。且つ其方法に就て久須美、廣井兩氏等より夫々注意あり。終つて宴を開き、安藤幹事の開宴並に松平理事歡迎の辭ありたるに對し、松平理事より校友諸氏の懇篤なる歡迎並に態々來會せられたる各地方代表諸氏の勞を謝する趣旨の挨拶あり。和氣

霽々裡に午後十時散會せり。同夜の出席諸氏左の如し。(次第不同)

- 久須美東馬 阪口仁一郎 齋藤喜十郎
- 櫻井 市作 松井 郡治 内藤 鷲郎
- 廣井 一 松木 弘 石黒大次郎
- 桑野 確次 石塚 三郎 荒川 謙二
- 安藤 文祐 齋藤庫四郎 舟崎 仁一
- 安倍邦太郎 川上 法勳 上野喜永次
- 廣島 一郎 高橋 銳二 關 太郎
- 清水 修策 今川 孝吉 笹川加津惠
- 金子 勇司 小黒作十郎 工藤 得安
- 佐藤 與一 森田 省策 小林 存
- 廣木 寛治 佐野 辰三

●應用化學科主任送迎會

去十二月廿三日午後五時永樂町永樂俱樂部に於いて開催。席上平沼學長より今回應用化學科主任を辭せられたる河合勇氏を送り、又同主任に就任せられたる小林久平氏を迎ふる歡送迎辭あり。之れに對して河合氏の謝辭、小林氏の答辭あり。主客歡談に時を移して散會せり。出席諸氏左の如し。

主賓

- 河合 勇 小林 久平

出席

- 平沼 學長 鹽澤 理事 田中 理事
- 淺野 科長 前田 幹事 山本 忠興
- 徳永 重康 松平 容吉 民野 雄平
- 野村 堅 野村 敬 張 忠一
- 三宅 當時 氏家 謙曹 早野七太郎
- 橋本 秀雄 宮澤清三郎 富井 六造
- 西澤勇志智 兵藤 藤吉

●早稲田叢誌發刊

今回大隈總長を始め教授講師の研究に成る學術上の成果並に時々學界政界其の他あらゆる方面の名流を招請し一般

學生をして聽講せしむる科外講義中の名論卓説を蒐集し且つ之れに學苑の近狀をも添載して永く之を保存すると共に本大學に深厚なる同情を寄せらる、人士に頼たんが爲め年二回發刊の早稲田叢誌を發刊する事となりたるが、その創刊號は本月中發刊の筈なり。

學生會合

●經濟學會の東京商業會議所見學 其後益活動しつ、ある我經濟學會は十月八日午後三時會員中の有志約五十名で東京商業會議所を參觀した。書記長服部先生に案内されて階下各室を見た後、初期の會頭濫澤男の胸像のある入口正面の階段を上つて、先づ商品陳列室を見る。東京に於て製造さる、物或は地方製造にして市内に販賣所を有する物約千五百點を陳列し購買者の便利を圖つてゐる。更に轉じて千代田の城を真正面に眺むる貴賓室等を見て最後に議場に至る。毎月開かれる全國六大商業會議所の聯合大會にはいつも此議場に經濟論の花が咲くさうな。服部先生は大體次の様な事を商業會議所概念として述べられた。

商業會議所には凡そ二種類ある。第一は數人の實業家が集まつて事業の發達改善策を研究する俱樂部の様なもので全く任意的のものであり、英國米國に専ら行はれてゐる。第二は法律の規定により實業上の代表者を出し實業上の問題を調査せしめ、且政府に貢獻する處あらしめるのであつて、之をドイツ式といふ。我國は此後者によつて商業會議所法を定め、大體次の様な事を規定してゐる。即ち商業會議所は法人とする事。其地區は市の區域により、設立するには議員の被選舉權を有すべき者三十人以上發起人となり、農商務大臣の認可を要する。仕事とし

ては、商工業の狀況及統計其他其發達に關する方案を調査發表し、常に商工業者及行政廳と連絡を執り又商工業に關する紛議を仲裁する事等である。議員の選舉權は其地區内に營業所を有し、定められたる營業税を一定額迄納付する者に存し、五十人以下の議員を選挙し、更に其五分の一以下の特別議員を、商工業に關する學術技藝又は經驗ある者から選ぶ。之等の議員は總て無給である。會議所の經費は議員の選舉權を有する者から賦課徴收する。

●東京商業會議所の定款によつて其内部組織の一斑を覗ふ時は、會議所を代表する會頭一名之を補佐する副會頭二名及事務を評議する常議員十二名を役員として置きて臨時役員會を開き、又年二回の定期總會に於て事業成績、通常經費の事を議し、臨時總會をも開く。事務は庶務、編纂、調査、會計の四課に分ち、一名の書記長が若干名の書記を指揮して處理してゐる。云々

(C, I)

●史學講演會 十月十九日鎌倉に關する史學大講演會を同師範學校内に於て開催し翌廿日會員鎌倉古跡の見學を行ふを以て其準備講演會を十月二十日、一時より本科二十教室に於て開催せり。今其概況を記せば

開會の辭

●關與三郎先生 今回史學會の初めての企たる見學旅行の準備講演會を本日開催するに當り、鎌倉に關し造詣深き三君の御講演は會員に取つて多大の利益ある事と信す。尙會員以外の多數の聽講諸氏は吾々の今回の舉に對し御贊同の意を表せられたるものと信じ深厚なる感謝の意を表すといふが如き意味を述べられたり。

拓殖史上より見たる鎌倉の地位
校友 高橋源一郎君

土地の開拓と人種の移動とは西より東へと海によりて進みたるもの、如し。随つて海岸の住心地よき處早く開け、東京灣内房州の外海まで古代人間の住居せる形跡あり。されば地勢の上より見るも、船つきの具合より見るもそれより以上なる鎌倉地方が早く開けざる理由なし。日本武尊の東征の時分には鎌倉は既に交通の衝に當り、奈良平安朝時代には明らかに此地方に七郷の存在せし事を想像するを得かくの如く早く開けたる鎌倉は武家時代に入りて忘るゝ能はざる重要な地位を占むることとなり。以下は其専門家たる兩氏に御願すとの意味なりき。しかも種々の故書を引用して説明丁寧なりき。

義貞の鎌倉討入に就て

校友 蘆田 伊人君

義貞鎌倉討入に就ては其通路は、太平記によるも誤りなきや如何にと論を起し、種々の例證によりて太平記説を承認し、義貞大塔宮の令旨を奉すと、尊氏の命を受くとの兩説に對して太平記、増境、實曆遺記、大日本史、久米博士の説等を引用して、其何れなりやの推斷は會員に待つと述べ最後に太平記より攻入りの概要(日時と戦況の概要)を抽出し、元弘記念碑島、塙文書目安、荻藩閩閩録、石川文書集古文書、大塚文書、系圖裏寫、税所文書等に就て大體に於て太平記に誤りなきを證明し世上太平記を一種の小説として看過する人々に對して頂門の一針を加へられたり。

鎌倉の史跡に就て

大森金五郎先生

鎌倉のことに就ては相撲風土記考、新編鎌倉史考によるを精確なりとす。尙地圖は昔のものには伸縮あるを以て陸軍省の地圖によつて

實測せざれば正しきものを得る能はずと述べ先生の地圖を擴大したる大地圖を指しつゝ、下の史跡について詳らかなる説明を加へられたり。説明中時に面白き傳説出で、先生の得意なる諧謔あらはれて、聽衆をして歸るを忘れしめたるの感ありき。

巡覽名所

- 壽福寺、英勝寺、上杉定政邸跡(扇谷)源氏山、長壽寺、淨知寺、上杉管領屋敷跡(山内)最明寺時頼墓、明月院、東慶寺、圓覺寺、建長寺、荒居園慶堂、巨袋坂、別當坊跡、鶴岡八幡宮、源頼朝墓、大藏幕府跡、若宮大路幕府跡、東勝寺跡、荏原天神社、鎌倉宮、護良親王墓、永福寺跡、大御堂谷、杉本觀音堂、大懸谷、報國寺、淨明寺、足利公方屋敷、明王院、

本日の聽衆は大多數といふにあらねど、緊張せる點に於て他會合の右に出づるものありと信ず、閉會は五時頃なりき。

●史學會員の史跡見學旅行 十月十九日より二十日に渡り史學會員の史跡見學旅行は諸先生引率のもとに鎌倉に試みられぬ。十九日午前七時四十分東京驛發の下り列車は大森、煙山、津田、關、西村の諸先生及び學生約三十名の一團を其一隅に乗せて疾風の如く走り一時半餘にして鎌倉に到着せり。師範教諭池永氏の案内にて一同は一先づ八幡社前鈴木屋に投ず。午前中は會員の自由行動、或者は逸早く江の島の名勝を訪ねて快哉を叫び、或者は稲村ヶ崎の險を踏破して昔を偲べり。午後は一同鎌倉師範學校に參集し史學大講演會を開く。聽講者は同地方の有識階級師範學校職員生徒等にして講堂立錫の餘地なし。會は午後

一時校長の挨拶に始まり、煙山先生の世界戦争に就てを皮切りとして、西村先生の鎌倉の先史時代、津田先生の盛衰興亡觀の變遷、大森先生の鎌倉時代史に關する所感等の講話あり。諸先生の蘊蓄の披瀝趣味津々として盡きず、人をして歸るを忘れしむ。散會後は一同歸館、和氣霽々の内に晚餐を共にす。時に鎌倉の秋色漸く深く千古の英雄の夢の跡を撫でおろす山風いと身にしみて覺え、蒼白き月は只獨り雲間を披いて墳墓の影をこの廢都に投ぐ。

明けて二十日大森先生引率のもとに師範教諭池永外一氏を東道の主人として先づ鎌倉五山の第三なる壽福寺を訪ね源實朝政子の墓をとりむらひ、上杉定政邸跡(扇谷)を偲びつゝ、淨光妙寺、最明寺時頼の墓、鎌倉五山の第四なる淨智寺俗に縁切寺と稱する東慶寺、鎌倉五山の第二なる圓覺寺、五山の第一なる建長寺、荒居園慶堂等を訪ね、巨袋坂を越えて鶴ヶ岡八幡宮に詣つ。殿堂大銀杏等源家の悲慘なる滅亡を偲ばしむ。師範學校にて中食をすまし、午後は大藏幕府跡、頼朝の墓、荏柄天神、護良親王墓、若宮大路幕府跡、北條氏執權屋敷跡等を訪ね、終に四面に敵を受けていたましく散り失せし鎌倉武士の最後北條高時の墓を訪ふ。打壞かれし墓標のこゝかしこに散れるも亦感深し。

六十餘州の中央政府方六町の幕府跡には何知らぬ顔なる人家まばらに立並び、馬上に天下を叱咤せし英雄も今は苦むせる墓標の下に靜かに眠れり。あゝ、今昔の感に堪へず。午後六時の上り列車に會員一同は身を托して無形の土産を背負ひつゝ、七時半頃東京驛につけり。

(名嘉地、下松稿)

●史會の集鴨病院見學 我が早稻田史學會に於いて、社會學研究の一助として、集鴨病院の見學を企て、十一月九日、其の豫備智識を得る爲めに、本科第十五教室に於て、講演會を開く、長船、古泉兩君の精神病患者に對する取扱ひ方の變遷並に社會との關係につきて研究發表あり、益する處多大なりき。

十一月十六日、煙山、關、清水、各教授引率の下に、學生約三十名、集鴨病院に至る、先づ講堂に於て、櫻田氏の講演あり、開口第一に世人の精神病に關する智識の幼稚なるを慨嘆し、次いで精神病の一般、我國及び各國に於ける精神病患者の状態、並に本病院の現況を概説し、最後に精神病患者を保護するは國家の利益を云々するよりは寧ろ、人道問題として勿論に附すべからざるを切言さる。終つて、新入、重症、危險、男、女の各病室を順次參觀す、吾が不幸なる同胞は、或は蘆原將軍の如く傲然たるあり、或は悄然として怨恨を訴ふるあり、泣くあり、笑ふあり、叫ぶあり、さながら夢幻の世界を行くが如し、されど豫期に反して、一般に鎮靜にして、從順なるに驚くと共に、自宅療養の非文明的にして、病院、若しくはコロニーの必要なるを感ず、特に如斯組織に於て、其の人に應じて適當の職業を與ふるは最も、患者の平靜を保ち恢復を早からしむるに於て、效果あるやうに思ふ、惜しむらくは我國唯一の完備せる此の病院にして、而も其の建築の狭少陰鬱にして陋館なるは嘆すべし、櫻田氏、柱を撫して曰く、「向ヶ丘時代、明治十四五年のものなり」と、此の點は切に世人の覺醒に待たさるべか

らざるなり。

漸く一巡して門外に出づれば、日未だ高く世人は戦勝を歌つて揚々たり、我等は此處に最も意味深き見學を終へて散會す。(史二、T、K)

●六機會第三回例會 十月十三日開催。雨あがりの郊外の秋、それは親しみの多い戸山ヶ原以上になつかしみをひきよせるものであつた。二年N組のグループがかうした所で終日師友集つて楽しく語り合ふ事のできたのを喜ぶ。玉川閣に眺をほし、(順序不同)

氏家 先生 阿部 先生 加藤字一 郎
原 信雄 板倉 闕吉 中居純一郎
池 保二 和田 戒三 奥村市太郎
湯淺 浩 山本 倍夫 三宅文武郎
松原 泉 田中 善治 富部寅五郎
木村 綠 丹羽 成徳 小松原壽次
三村 登 飯田 真平 佐々木勝治
福田 耕 久野 政一 佐々木久雄
山形 齋 森岡 眞篤 福山 緑治
石川 操 田代 計輔 杉浦 昌平
野村 猛 松本 浩二 西岡 義也
澁谷 一 勇 澤本 孟彦 小川 二郎
阪本 安 安藤 彦次 間庭 秀治
末光 弘兵 平野 五郎 味香 啓次
安田 善雄 藤井 誠一 箕田 一郎
清水 善雄 平田 重徳 木暮 文雄
藤本 憲吉 中根 正一 刈谷 忠篤

畫食をすませてからは眼下のグラウンドで野球やリレースなど有志の人達によつて行はれた。京都の清水堂をかたどつた玉川遊園地、玉川閣の階上階下はさしに静寂を破つた。二時半から氏家、阿部兩先生の有益なるお話を謹聴した。様に出て一同記念撮影をし、後

ち二組にわかれて討論會をした。

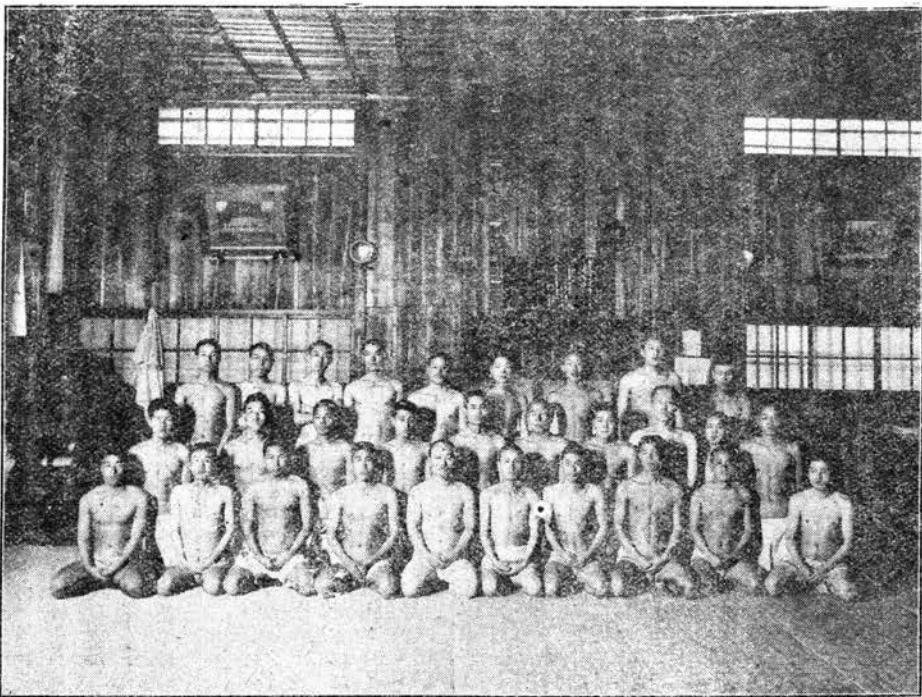
くつきりと浮きでた川の流れが銀色にかややいて、一面黄色の田は次第次々と夕やみに沈んだ。小川に咲く野菊を摘みつ、停留所にゆく。朝特に我等一行の爲にだしてくれた二臺の電車はそのまゝに我等の爲に待つてゐてくれた事を知つて、感謝の念にたえなかつた。

——(大正七・二〇・二四・稿・阪本安)——
●岡山出身學生會 十一月廿三日午前十時矢來俱樂部に於て開催。平沼學長、岸本教授、難波參助會幹事臨席の外校友學生約三十名出席。更井幹事開會の辭を陳べたる後校友杉山義夫氏及中岡君平沼學長淺野理事就任祝賀の辭を述べ、之れに對して平沼學長の挨拶あり。更に岸本教授靜座修養に關する有益なる講話、難波幹事挨拶の辭を兼ねて學生諸氏に對する希望演説あり。終つて茶菓を喫しながら各自の感想を述べ和氣藹々裡に午後二時散會せり。

●群馬縣人會 十月十三日午後一時、遠藤博士邸に於て秋季大會を開催す。來會者凡そ九十名、近來稀れに見る盛會にして、プログラムは幹事小川信太郎氏の開會の辭に始まり、會長遠藤博士副會長岡田和四郎氏の挨拶、來賓弓削田精一、淺見喜代藏、生方敏郎、湯淺吉郎、民野教授及び校友綿貫六助、佐藤莞爾諸氏の講演を経て開宴。餘興「What do you」會員の隠し藝は本日と呼びものとして來會者を笑殺し、最後に校歌「都の西北」を合唱して八時和氣藹々の裡に散會せり。

尙、當日博士より頌與を辱うせし「國體と中産黨」は近時紛糾錯雜せる社會問題の中軸を捉へて博士年來の主張の根本を明示せられたるものとして、吾人の蒙を啓くもの多々ありき。(幹事報)
●瀧原會 九月二十八日午後五時より角屋に於て第五回例會を開催す。雨漸く止んで秋月のさやかに照り渡る眞に月明星稀鳥鵲南飛とも言はまほしき夜なりき。やがて出づる茶菓の間に相互の會話口吟む歌の心の豊さを感じつ、勇者の歡びを味ふ。終るにのぞみて母校宇都宮中學校歌及び本校歌を合唱し和氣藹々の内に閉會す。時正に十時。出席者左の如し。(舊幹事寄)

上野 正三 五月女久五 小倉 薰
古口 金吾 松本 茂夫 井面喜千松
藤沼 謙昌 手塚喜次郎 細川 進一
天谷 三郎 小山 義一 手塚眞一郎



靜座會發會紀念(大正七年十一月廿八日) (前列五人日人本生)

石塚六郎 小野性一 那 靜坐會 成る刻 苦坐禪し 數十年に して悟り 得る處を 短日月に 感得し得 るものは 岡田式靜 坐法なり 多年の痼 疾も一朝 にして癒 え、靈の 葛藤に惱 める者は 直ちに雲 を排し天 を望むの 妙境に達 す、靜坐

の效果一々列擧するを得ず、昨年十一月早稲田大學靜坐會成る。本會は斯道の大家たる本大學教授岸本能武太先生指導せられ、會員日熱心に修道しつ、あり。目下會員七十三名、

その効果顯著にして中村幹事の如き既に體重二貫目を増加せり。靜坐内觀にて大自然に調和し、順調圓滿なる血行と金鐵の軀幹とを養ひ學問の能率を増進せんと欲する一般有志者の御入會を待つ。修道は毎日早朝及木曜午後四時より本校柔道場にて。柔道寒稽古中は附近の寺院を借用する筈なり。

●早稲田史學會例會 十二月七日午後一時、第二十五教室に於て、史學部例會を開く。講師津田左右吉氏、校友藤本慶祐氏の研究發表あり。出席者三十名に及び頗る盛會なりき。

先づ津田先生は『我國上代風俗に關する一二の觀察』と題し、上代に於ける神の性質、種類及びそれに對する思想感情の變遷に就て述べてられ、次に、吾國に特殊なる同族結婚に關して講ぜられたるが、引證該博、解釋斬新、論斷明快にして、我等は容易に祖先の神に對する觀念、上代社會制度の一要素を理解するを得たり。殊に、國史研究方法に論及せられたるは、學生今後の研究に多大の暗示を與へられたるものと云ふべく、二時間半に亘る講演は、興味津々として飽くを知らざりき。次に、藤本先生立つて『ルネッサンスに就いて』述べられたり。ルネッサンスの意義由來、沿革、影響を詳説せらるゝこと懇切を極めしが時間の都合上、伊太利外の各國文藝復興の特色を省略せられしは残念の次第なりき。終つて茶菓を喫し、談笑に花を咲かし、和氣藹々の中に散會したるは五時なりき。ちなみに講師校友の出席者次の如し。(七・二・七・K・M)

煙山、清水、關、大森、西村、津田、原、今、の諸先生、高橋、蘆田、原田、藤本の五校友。

●研究講話會 理工科電氣工學科二年有志より組織されたる該會は、第一回研究講話會を曜日午前十時より開催せり。講演者竝に題目左の如し。

- 一、電氣工學に表れたる美學的方面 木原 優作君
- 一、二次電池概論竝に本大學蓄電池室に於ける電池状態に就きて 榎尾 榮君
- 一、カーレント・メーター 高田 先生
- 一、所感 上田 先生
- 一、電氣爐の電極に就きて 坪内 先生
- 一、不定 山本(忠興)先生

午後四時半盛會裏に閉會す。
●埼玉縣人會 十月十五日午後五時秋季例會を神田區小川町今文に開催す。此日雨天にも拘らず、田中會長始め先輩學生諸君の會する者左記三十二名に及ぶ。幹事遠藤君の開會の辭に始り、會長田中唯一郎氏の支那漫遊談加藤代議士の政黨政治觀等有益なる講演あり。次でデザートコースに入り、先輩諸氏學生諸君の自己紹介あり。盛會裡に午後九時閉會す。

- 先 輩
- 會長田中唯一郎加藤代議士 岡本 季藏
 - 栗原 雅信 長島富三郎 太田 守男
 - 村田 正勝 遠藤宗之丞
- 學 生
- 太田 忠順 山崎 秀雄 坪井 武雄
 - 前原孫之助 林 匡 岩 崎
 - 角 田 金 子 上利 武
 - 星 野 茂 木 白鳥 鳳松
 - 大 塚 齋藤 隆平 遠藤 智

細 野 石 川 野口 達
矢部 七郎 大越營二郎 岩田 芳夫
石 川 高田 義雄 長谷川安兵衛

●永樂俱樂部消息

▲會我祐邦君送別午餐會 日本電報通信社を代表して講和談判地に出張の爲め、佛國に向け出發せらるゝ會員會我祐邦君の送別午餐會を拾貳月拾八日開會せり。出席は主賓會我祐邦君の外左の諸氏なりき。(次第不風)

- 河野 九峰 堀田 正由 降旗元太郎
 - 錦織 幹 田中 穗積 鹽澤 昌貞
 - 佐藤甚九郎 田中唯一郎 酒井 醇一
 - 杉野 喜清 齊藤和太郎 東儀 季治
 - 井上 雅二 村井 五郎 田中小太郎
 - 能勢 吉夫 徳久 武治 池田 龍一
 - 永田金三郎 川島 實三 若林 成昭
 - 石井 政吉 小松 林藏 丹羽 幸夫
 - 田中四郎左衛門 森 盛一郎 鶴澤 宇八
 - 矢部 清治 平沼 淑郎 早川 徳次
 - 内田七郎次 旗野美乃里 前島 彌
 - 上遠野富之助 小山 谷藏 芳賀 恒介
- ▲忘年会 拾貳月二十五日午後五時より忘年会を開會左の諸氏出席せられたり。
- 能勢 吉夫 星野 治作 永田金三郎
 - 中野 勇平 八田熊次郎 長谷川誠也
 - 佐藤甚九郎 田中小太郎 井口 誠一
 - 村山駒之助 黒瀬 隆吉 東 則正
 - 徳久 武治 中野禮四郎 森河 晶吉
 - 齋藤忠太郎 平沼 淑郎 田中四郎左衛門
 - 松山忠次郎 平野英一郎 伴野 賢造

- 長谷川正光 錦織 幹 大槻 音松
- 坪谷善四郎 鈴木徳太郎 深澤 政介
- 桑原 淳真 井手眞機雄 市川 又彦
- 河内富次郎 松垣 新一 中澤 權藏
- 岩佐善太郎 崎山刀太郎 大橋 誠一
- 黒田善太郎 小山 谷藏 丹羽 幸夫
- 渡邊代五郎 大島居吾三 廣井 一
- 關 和 知 村上猶太郎 山澤 俊夫
- 田坂 眞雄 大 澤 孚 小川愛次郎
- 齋藤 隆夫 鈴木治三郎 鈴木佐平次
- 内田七郎治

●大隈總長の國府津行 總長大隈侯爵は夫人竝に令孫同伴十二月廿八日午後零時五十分東京驛發國府津別邸に赴かれたるが同所に於いて新年を迎へらるゝ趣なり。(十二月廿九日稿)

●杉山早稲田實業學校長の辭任 早稲田實業學校長杉山重義氏は今回同校長を辭任。本大學教授專任となられたり。

●宇都宮講師の歐米視察 講師宇都宮鼎氏は歐米視察の爲め十二月十日歸濱發天津丸にて米國へ向け出發せられたり。

●久松講師夫人の逝去 講師久松廉吾氏夫人直子刀自は永々病氣の處十二月十九日午後三時十分遂に逝去せられ、同廿一日午後一時牛込區原町大龍寺に於いて葬儀を営まれたり。

●社會政策學會大會 社會政策學會にては其第十二回大會を去十二月廿一、二の兩日に互り本大學講堂に於て開催したるが、その第一日即ち廿一日は午後一時より開會し、來會者二百餘名。本大會よりは平沼、鹽澤、田中三博士及北澤教授出席せられ、又本大學政治學會並に經濟學會の學生委員諸氏種々斡旋の勞を執られたり。

先づ平沼博士開會の辭を述べられたる後ら當日の議題「婦人勞働問題」に就き河田京都法科大学教授、阿部慶應大學教授、森戸東大法律科助教授の研究報告ありて午後六時閉會。尙ほ晚餐後十時半頃まで當日の議題たる婦人勞働問題に就き盛んに論議を闘はし、やがて散會せり。

第二日たる廿二日は正午より開會。劈頭鹽澤博士歡迎の辭あり。次いで「勞働問題の精神的方面」と題せる同博士の講演あり。後ち高橋慶應大學教授「治安警察法と勞働組合の關係」、井浦東京高商教授「米の投機と社會政策の關係」、森本札幌農大教授「最少生活費に就て」、米田京大法科講師「智識階級と勞働者階級」の講演ありて六時閉會。

閉會後大隈侯爵邸に於いて懇親會を開きたるが、來會者六十名。大隈侯爵も臨席せられ一場の演説あり。盛會裡に散會せるは午後十時なりき。

● 沼學長の講演 學長平沼博士は通俗地理歴史協會の招請に應じ、十二月廿六日午後七時より大成中學校講堂に於ける講演會に臨み「經濟史概論」の題下に講演ありたり。

● バンク、バー在住邦人觀光團の來訪 米國カナダ、バンク、バー在住邦人三十餘名より成る觀光團諸氏は校友鈴木重三氏引率の下に十二月十二日總長大隈侯爵邸を訪ひ、侯爵より一場の講話あり、後ち本大學を參觀し、記念資金の中へ若干の寄附ありて辭去せられたり。

通信

● 米國ファイラデルフィアより

……留學生……島田孝一氏 謹啓其後は意外に御無沙汰致しまして申譯も御座りませぬ。

去る五月六日の早朝桑港に入港いたしました。三日間滞在して居りました。その間領事館の別府氏は先生から御手紙を御送り下さいましたこととして特に種々便宜を計つて下さいました。新めて御禮を申し上げます。又豫科で初めて簿記を教へて下さいました増田恒藏先生にも御目にかゝるものが出来ました。五月八日午後八時桑港を出發いたしました。途中ロアスアンセルス、グラントキアニオン、シカゴ、ナイアガラフォール、パツフォロ等愉快に見物いたしました。五月十六日午前九時五十五分無事當市のアロード・ストリート停車場に到着いたしました。パツフォロへは天洋丸で同じ船室に居りました。三井物産會社の方三名と共に旅行をして参りましたので誠に好都合で御座りました。

到着の翌日慶應義塾教授増井幸雄氏を御尋ねして種々ペンシルウェニア大學に關する御注意を受けました。その時丁度増井氏の御宅に早大出身の宮川氏と曉星出身の星野氏が居られたので増井氏から紹介していただきました。外國に來れば日本人ならば誰でもなつかしいので出身學校などは眼中になく互に親しく話しあふことが出来るのは非常に愉快に思つて居ります。東京を出發する折御話申しました Miss Peacock の御宅は大學と反對の方角なるトレスデールと云ふ郊外にあるので電車を利用して大學に來るのに二時間を要します。あまり遠いので増井氏の御世話で四十二丁目に見つけて一先づ引越をいたしました。五月十九日のとてでありました。然るに五月二十五日になると東京高商の上田辰之助氏がワシントン旅行から御歸へりになり同時に氏の居られる家の一間が空いたので来てはどうかと云ふ御勧めがあつたので、再び引越をいたしました。今は上田氏と共に三階の二部屋を借りて

誠に愉快に暮して居ります。場所はホルティモニアウエニエと云ふ所で大學へは十五分で行けるのです。此の手紙に用ひましたアドレスはそれと異つて居りますがそれは私が長く此處に居られるかどうかかわらないのもつと永久的な確實なものを用ひた次第であります。 * 3305 Spruce St. は International Student Club と云ふのがある所です。此の俱樂部は大學の Y.M.C.A. が主になつて作つたものでペンシルウェニア大學に來る總ての外國人の學生をして淋しさを感じさせないのがその目的の一であります。故に此處に來る學生は日本、支那は勿論印度、シリア、歐洲及南米各國にまでわたつて居ります。御手紙を下さる場合には之に御宛下されば最も確實に私の手に入ると思ひます。

五月二十日の朝日本以來暮つて居り且今年の秋から指導していただくジョンソン先生に御目にかゝりました。先生は白髮の濃厚な老紳士でありまして深切にも今後取るべきコースを御選定下さいました。(別紙を御覽下さい)且夏中休暇中に讀むべき参考書も指定して下さいました。猶又 Dr. Young, Dr. G. G. Huebner, Dr. S. S. Huebner, Dr. Smith, Prof. Cushman, Mr. Harris 等の諸先生を御紹介して下さいました。

本年は當ペンシルウェニア大學は夏期學校を開きません。戦争の結果學生の数が非常に減少した為だとも云ひます。之には私は少からず驚かされました。ジョンソン先生の御指圖でコロンビア、コーネル、ハーヴァード三大學から規則書を取寄せ猶ジョンソン先生と御相談してコロンビア大學の夏期學校に入學し經濟原論のコースを取ることにいたしました。従つて本年の夏は紐育で暮すことになりました。と同時に小林新君に御目にかゝる機會があるだらうと楽しんで居ります。コロンビアの夏期學校は七月八日の月曜に始り八月中旬に終ります。私は獨立祭の頃まで當地に居つてそれから紐育に行きたいと思つて居ります。

五月二十二日の朝學長のスミス先生を御尋ねいたしました。落ち着のある方です。先生に乞つて圖書館に入る切符をいただきました。猶普通の切符の他に Green Berets と云ふものもいただきました。そこでこの頃は朝から午後一時迄は必ず圖書館の書庫に入つて自分の好む書を勝手に自分て本棚から出して其處にある小形な机の上で讀んで居ります。之だけはほんたうに嬉しいと思つて居ります。ジョンソン先生の御指定下さつた本も此の方法で讀んで居ります。此の方法を七月初旬まで續けてそれから紐育に向ふ豫定であります。

五月二十八日の夜吾々ワシントン・スクールの既に屬した學生及將來屬すべき學生五人がジョンソン先生をテイナリーに御招待いたしました。五人の學生とは増井氏、上田氏、星野氏、深川氏、(長崎高商の留學生及び私です。猶その他に前述の宮川氏及大阪高商の田近氏も居られるのですが、此の晩は用事の爲に御出席になりませんでした。場處は大學に近いホテル・ノルマンディーと云ふ家でした。先生には午後七時から十時迄種々爲になる御話をして下さいました。之によつて日本人の學生と先生との關係が益親密になつた様に愉快であります。身體は日本出發以來誠に丈夫で御座ぬますから御安心下さい。又頗る元氣に暮して居ります。先は右近狀御報告まで 敬具

大正七年六月一日

ファイラデルフィアにて

島田孝一

田中穰積先生 梧下

● 米國便り

……校友……深澤義弘氏 拜啓爾來乍思非常なる御無沙汰仕何とも申譯無之候愈盛夏酷暑の候折柄益御清邁 御消光可被遊奉慶賀候降而小生無事勉學研究致居候間何卒乍憚御休神被遊度候、扱て小生出發に際しては種々一方ならぬ御配慮相煩し奈ふ存上候シカゴ市にては總領事

に會し御紹介被下候姉齒領事秘書にも相會するを得種々御高説拜聞致申候學校選定などの點に於ては參考一方ならずと存居候

小生も當初は田舎に英會話練習に一ヶ年を費す豫定に御座候處諸賢の説は皆商業中心地組育行きを勧められ候間小生も千萬可なる可くと存じ當校の一期間終了後九月末頃組育に出てたく存居候會話の進歩は獨り高杉教授に御禮申上ぐ可き事多く上陸以來大失敗も無之今日迄經過致申候次第會話の爲めに三ヶ月間當地にて頭痛に悩めるは愚かな消費かと存じ今後渡米の諸賢には日本にて大いに話せる程度となりたる後渡米は最も策の得たるものと存ぜられ友人などにも申送候

小生組育行きに就きては、ホストン・ハーバードに學ぶるも小林氏にも問合せ申候處至極可なりとの御説にて氏も今冬又は早春組育に出らるゝ由申越れ候組育にては、コロンビア又は組育大學が何れかに決定致す考にて目下熟考中に御座候何卒母校よりの兩校宛御紹介狀相仰ぎ度御配慮の程伏て御願申上候 組育市在住の校友に御紹介狀賜度重ねて御懇願申上候次に戰時中の米國之れに就き申候問題は頗る大なるものにて大いに吾人青年の學び將來に資せんとする諸問題を探究致度追々讀書などに大いに努力致居候

米國の宣戰と軍國主義化せんとする米合衆國、米國と戰後の貿易政策など實に面白き事のみ御座候と貴賢既に御承知の通り通信總て八釜數御座候間あまりに申上げ得ざる可くとは存候へ共何れ追々に見聞御報知申上度存居候 殊に當校は既に千三百名の學生を軍人たらしめし地にて諸建物は兵士の訓練用と化し學生の大部分は女子なるに至りて猶ほ且つ二千に餘る兵の二週間毎に出入するを見大いに米國の兵士に就きては興味を起し見物致居候先は不取敢御何旁御依頼迄如斯に御座候 敬具

七月十七日 深澤義弘
前田幹事殿 御机下

●ハーバードより...留學生:小林新氏

(前略)前般御報致候如く目下ハーバード大學研究科にて駕馬に鞭を馳せ勉勵拮据罷在り今秋より金融論擔任 Prof. Sprague が公命にて華府に滞在し且同 Asst. Prof. Anderson が新學期より辭職致し候爲め野生等の研究に付き一方ならぬ艱難を來し候へども之れも時局柄詮なき災難と觀念し其後任なる Monce と申す少壯學者の助言の下に特殊の研究を進むる傍ら統計學之れに關聯せる高等數學を自修致し居り候)及び新語學の講義に列し居り候敢て統計學派數理學派の彙に倣はんとするには無之候得共野生專攻なる金融保險の研究に當り統計及數理に通曉するを要するは論を俟たず且此種の研究は聊か野生の趣味に適するらしく多大の興味を感じつゝ研究致居候先は近況御報旁寸楮如此に御座候(下略)

十一月十八日 小林 新
平沼先生 御侍史

南米の最小國ウルグアイの首都モンテビデオより遙に御健康を祈上候

十月八日 信夫 淳平
小生明春二三月の交歸朝の積りに御座候

早稻田大學 平沼 淑郎殿

校友會報

校友動靜

校友諸氏の動靜左の如し。

- 田上友治(7大政) 一年志願兵主計として金澤市歩兵第三十五聯隊第十二中隊第二班に入營
- 郡司 秀(四四政) 鐵道院を辭し南洋比律賓郡島ミندگانオ洲に渡航
- 小池輝男(6政) 一年志願兵として第一師團歩兵第一聯隊に入營
- 杉田 駿(三五政) 日清生命保險會社監査役
- 鈴木寅彦(二九政) 日清生命保險會社取締役
- 森盛一郎(三八大政) 日清生命保險會社取締役
- 安田善造(三九大政) 岩手縣盛岡市安田銀行支店に轉動
- 今井完造(三三政) 兵庫縣武庫郡岩屋株式會社日洲商會支配人
- 近藤基喜(三二政) 大連市遼東新報社に入る
- 木村知義(8政) 京都市烏丸辯樂師角藤田銀行京都支店に轉動
- 岡田留三郎(7政) 大阪市西區九條中通一丁目浪速銀行九條支店勤務
- 山田喜兵衛(7政) 一年志願兵主計生として久留米歩兵第四十八聯隊第十一中隊に入營
- 保倉爲七(二〇政) 長岡市株式會社六十九銀行本町支店長に轉任
- 横田愛三郎(7大政) 一年志願兵として甲府歩兵第四十九聯隊第五中隊入營
- 赤津亮次郎(二九英政) 丸之内古河礦業會社勤務(小石川區林町六四)
- 奥村茂敏(6政) 久留米歩兵第四十八聯隊第十中隊入營
- 野見軍治(6政) 一年志願兵として歩兵第四十聯隊第四中隊に入營
- 恒河吉毅(二六政) 鐵道院岡山運輸事務勤務
- 河野忠一(6大政) 水川商會支配人(小石川區關口水道町二二)
- 高垣光藏(三八法) 支那濟南南埠三馬路八一號天理教濟南宣教師所長
- 森内英太郎(7大法) 大阪市西區土佐堀加島銀行勤務
- 川合安期(3法) 辯護士試験に合格す
- 笠松武太郎(7法) 京橋區木挽町九丁目兜島組に勤務
- 西岡 襄(7大法) 臺灣銀行本店に勤務(臺北新北門街一ノ七)
- 宮本繁造(7法) 久留米歩兵第五十六聯隊第二中隊入營
- 古橋林司(三九法) 岡山市門田鐘紡岡山絹糸工場勤務
- 喜多壯一郎(6大法) 留學の爲め米國渡航
- 長濱信太郎(3法) 大阪市北區上福島中三丁目合資會社三枝商會に轉動(京都府嵯峨)
- 大澤逸策(6法) 靜岡市吳服町帝國生命保險會社靜岡出張所勤務
- 光信 亨(二四行) 三重縣宇治山田市助役に轉任(同市吹上町一七)
- 渡邊 隆(四三大文) 三井物産株式會社本社に入る(市外西大久保三六九青戸波江方)
- 堤 淨祐(四四大文) 滿洲營口新市街滿鐵礦業部販賣課出張所勤務
- 馬場一(三一大文) 岡市縣邑久郡笠加村村長
- 沼田 穰(4大文) 文部内務兩省の要務を兼ね留學の爲の渡米
- 辻龜太郎(四〇大文) 鹿兒島縣立第一鹿兒島中學校に轉任
- 上肥政勝(6大文) 廣島市私立廣陵中學校を辭

し埼玉縣浦和町に歸住

●堂前久七(2大文) 丸善株式會社を辭し市外高田村大字高田三六に居住

●今西吉治(7大文) 報和新聞編輯部に入る

●宮水龜年(7大商) 金澤歩兵第三十五聯隊第十二中隊に入營

●中村憲太郎(4大商) 神戸市海岸通二ノ九七日洋海運商會勤務

●吉武靜哉(4大商) 東亞織布株式會社勤務(小石川區水道端二ノ一一)

●神田健一(6大商) 歩兵第三十三聯隊滿期となり愛知縣海部郡立田村大字宮地に歸住

●山口一郎(7大商) 大連寺内通増田貿易會社支店に入る

●麻生 純(5大商) 第三十三聯隊除隊となり旭硝子株式會社本社營業課に復職(牛込區鶴卷町三〇九大成館内)

●水上英三(5大商) 一年志願兵現任滿期除隊となり神戸市相生町三葉商事株式會社神戸支店勤務(同市山本通四ノ一一五、三葉社宅内)

●紀伊末雄(6大商) 北海道石狩國輕川驛日本石油會社北海道製油所に轉勤

●四王天正實(7大商) 一年志願兵として赤坂區榎町歩兵第一聯隊第八中隊に入營

●古岩井善太郎(4大商) 株式會社朝鮮銀行東京支店勤務(市外集鳴町字宮仲二四四四)

●樋口一五郎(3大商) 大阪市北區堂島濱通三丁目ウヅルカト兄弟商會出張所勤務

●高原英三(6大商) 一年志願兵として岐阜歩兵第六十聯隊第五中隊に入營

●加藤憲之(四四大商) 出征第三師團司令部付陸軍三等主計(經理部所屬西伯利ホルチンスク野戰倉庫長)

●田中 稔(6大商) 近衛歩兵第二聯隊第十二中隊に入營

●前田政勝(7大商) 一年志願兵として甲府歩兵第四十九聯隊第二大隊第八中隊に入營

●柴田愛蔵(四〇大商) 株式會社武州銀行常務取締役(埼玉縣浦和町)

●山本喜作(7大商) 甲府歩兵第四十九聯隊第二大隊第七中隊入營

●鹽野恒吉(7大商) 一年志願兵として青森歩兵第五聯隊第三中隊入營

●山内小枝(7大商) 一年志願兵として弘前歩兵第三十一聯隊第十二中隊入營

●小島文雄(7大商) 一年志願兵として宇都宮歩兵第六十六聯隊第三中隊入營

●中村正司(四一大商) 大連市龍田町一八に於て木材販賣及製材業中村商會を經營す

●山本紮三(四五大商) 臺灣新竹街臺灣商工銀行支店勤務

●大宮光男(6大商) 市外淀橋町大字角答東京電氣製鍊株式會社勤務

●八子正敬(3大商) 神戸市川崎造船所會計課に轉勤

●中村芳次郎(6大商) 一年志願兵として和歌山歩兵第六十一聯隊第十二中隊に入營

●戸叶悌次郎(5大商) 神戸市加納町三井東神倉庫神戸支店に轉勤

●松野竹吉(四三大商) 日本高速度鋼株式會社勤務(在原郡大森新井宿九六九)

●高木隆吉(四〇大商) 佛國へ出發を命ぜられ二月十日講和委員に隨從出發せり(横濱市三井銀行支店員、佛國巴理帝國大使館又は英國倫敦三井物產會社支店員付)

●田中周之助(四四大商) 田原製作所に入る(本郷區弓町二ノ一一三)

●早瀬太三(3大商) 日本橋區本銀町三ノ一四早瀬塗料店東京支店勤務

●矢島敏雄(7大商) 三菱造船會社に入る

●白瀬庄三郎(7大商) 大阪市西區靱下通一ノ二加藤商店に入る

●水谷哲四郎(7大商) 富山歩兵第六十九聯隊第四中隊入營

●中津英一(四一大商) 朝鮮全羅南道慶山浦東洋拓殖會社出張所に轉勤

●寺田義勝(7大商) 一年志願兵として久留米歩兵第四十八聯隊第十一中隊入營

●小林孫一(7大商) 米國留學中

●猪田五一(7大商) 日本銀行を辭し滋賀縣神崎郡北五個莊村に居住

●法貴宗一(7大商) 一年志願兵として近衛歩兵第一聯隊第二中隊入營

●諸戸一郎(7大商) 愛知縣西春日井郡守山歩兵第三十三聯隊補充大隊第三中隊入營

●山本喜作(7大商) 甲府歩兵第四十九聯隊入營

●五十嵐信藏(4大商) 東京電氣株式會社販賣部東京出張所勤務(牛込區早稲田鶴卷町一一二齋藤宗太方)

●星島 茂(4大商) 社會政策研究の目的を以て

●ジョンズ、ホプキンス 大學留學の爲め米國渡航

●金澤柳壽(2大商) 麴町區内幸町一ノ三株式會社安部幸兵衛商店羊毛部に轉勤

●甲藤長氣(2大商) 支那天津日本租界日本郵船株式會社支店に轉勤

●能勢正巳(6大商) 大阪市北區堂島濱通二丁目大阪汽船信託株式會社勤務(神戸市兵庫六番町一丁目三十五番屋敷)

●小林博司(7理工) 佐倉歩兵第五十七聯隊第十中隊入營

●淺野謙次郎(2理工) 横濱市橋本町二丁目大藏省臨時建築課出張所に轉勤

●原喜一郎(3理工) 浦賀船渠株式會社を辭し神奈川縣高座郡茅ヶ崎町南湖下町寺澤別荘内靜養

●多賀叔男(6理工) 北海道札幌郡江別富士製紙株式會社勤務

●明戸一郎(7理化) 一年志願兵として水戸工兵第十四大隊第三中隊入營

●山縣又郎(三九法制) 臺灣臺北中學校教諭に轉任す

●井川金助(四一英) 湯淺貿易株式會社下關支店勤務

●阿部徳三郎(7數) 朝鮮仁川公立商業專修學校教諭(仁川寺町六三東郷旅館内)

●岡本美根夫(3英) 福岡縣八幡製鐵所庶務課勤務(八幡市大藏羽衣町一丁目)

●齋藤才次郎(7推) 梅田商會に轉勤(京橋區南小田原町一ノ一八)

●美土路昌一(3推) 大阪市北區中之島三丁目朝日新聞合資會社に轉勤

轉居

校友諸氏の轉居左の如し。

●野間五造(評議員) 牛込區市ヶ谷仲之町三八

●松井 等(講師) 牛込區矢來町三番地中ノ丸八

●杉野健治(三九大政) 四谷區南伊賀町三四

●佐藤魁一(三六英政) 兵庫縣武庫郡四灘村畑原

●日下仲藏(三八政) 神戸區猿樂町二ノ六

●河井常三郎(7大政) 牛込區横寺町四〇盈進館

●高木貞雄(6大政) 神戸區美土代町三ノ四大島館内

●黒井梧樓(5政) 市外下戸塚三〇三信水館内

●中里滿藏(三六政) 本郷區森川町一本郷館内

●二見七郎(7政) 四谷區坂町一八田屋方

●飯田利信(7大政) 牛込區下戸塚町三三南都方

●山菜金吾(四四政) 小石川區小日向水道町九〇

●渡邊慎治(4政) 兵庫縣水上郡柏原町津田敦雄

●和田一郎(6政) 市外西大久保四九一

- 深川清英 (3 政) 府下青山北町七ノ一
- 三好 胖 (6 政) 大阪市北區西野田中江町二四九山下貞重方
- 武田信一 (四〇大政) 小石川區武島町二〇番地田卷方
- 堀 重三 (四二大政) 名古屋市中區南武平町四ノ二七
- 鈴木廣助 (5 法) 牛込區中里町四
- 大屋善次郎 (三四法) 本所區千歲町七二田島健藏方
- 平岡眞澄 (7 大法) 德島縣阿波郡市場町
- 吉川 靜 (4 法) 埼玉縣浦和高砂町四〇三〇
- 新谷準一郎 (7 大法) 靜岡縣清水港五七〇山本佐喜藏方
- 大久保一也 (7 法) 麻布區一木松町四一倉島方
- 竹内行一 (四一大法) 神奈川縣橋樹郡生見尾村
- 鶴見七九七 (株式會社淺野造船所社員)
- 町田春貞 (二〇法) 札幌區南七條山鼻町四一五ノ一
- 清水正範 (6 法) 本郷區駒込林町一七九
- 谷口清作 (三九法) 府下高田村大原一五五六
- 寺尾熊次 (四二法) 長春新市街四十七區十號
- 笠井吳郎 (2 大法) 神戶市葦合町一八九五
- 西條八十 (4 大法) 小石川區駕籠町四六
- 岡田三郎 (7 大法) 府下雜司ヶ谷水久保一四三
- 木下永二 (四四大文) 廣島市大手町九ノ一三三雜波ハツ方
- 德滿早苗 (三七大法) 鹿兒島縣鹿兒島郡吉野村川上
- 芦田正友 (6 大商) 京都府丹波國天田郡雀部村字土師
- 武田鼎一 (四〇大商) 下谷區上野櫻木町四五
- 佐藤千吉郎 (四三大商) 下關市宮田町四〇一ノ二 (同市東南部町有光商會勤務)
- 大久保雄四郎 (6 大商) 下谷區上野櫻木町七現
- 龍院內
- 沖中恒幸 (7 大商) 大阪市西區靱南通り一ノ九
- 松村政馬 (四一大商) 四平街滿鐵南社宅
- 奥山一雄 (四三大商) 麻布區新廣尾町一ノ一五番地
- 高原政治 (四二大商) 雙町區三年町一、竹谷方
- 小林正美 (6 大商) 大阪市北區上福島北二ノ一
- 富田儀三郎 (2 大商) 一三福島館內
- 富田儀三郎 (2 大商) 大阪市南區國分町一六八ノ二
- 足立光一 (7 大商) 牛込區矢來區四一豐田方
- 小林孫一 (7 大商) c/o Pomona College, Claremont, Cal., U.S.A.
- 深澤義弘 (7 大商) c/o Japanese American Trading Co., 15-21 Parkrow, New York City, U.S.A.
- 堀畑正一 (2 大商) 岡山縣川上郡吹屋町字坂本
- 田中保男 (2 大商) 本郷區駒込曙町十六番地トノ四號
- 稻垣伯勝 (四三大商) 市外上越谷三〇九
- 大橋 昇 (6 大商) 神戶市平野楠谷町六十九番屋敷
- 中野傳三郎 (四二大商) 仙臺市本橋町二〇
- 宇佐見德輔 (四一大商) 小石川區小日向臺町一ノ二八
- 水野嘉一郎 (6 大商) 大阪市東區東高津南ノ町一六野田方
- 柿崎喜代治 (2 大商) 本所區吉田町三四
- 渡邊八郎 (5 大商) 牛込區納戸町二青木恭平方
- 青木郁三 (四一大商) 名古屋市中區三藏町三ノ二〇
- 白井耕一 (四〇大商) 本郷區駒込坂下町二四八
- 西林忠治 (四〇大商) 市外高田村大字大原一五二八
- 西尾敬介 (四三大商) 麻布區坂下町一

- 高崎 鑾 (四一大商) 兵庫縣武庫郡今津村津門村字南前田二〇八 (西宮東口尼道通)
- 石井 定 (5 理工) 兵庫縣鹽屋驛裏
- 原島善四郎 (6 理工) 市外西大久保四二大西德三郎方
- 江浦達五 (2 理工) 市外下落合五二四
- 竹田米吉 (3 理工) 市外高田村雜司谷龜原六一
- 武南倉造 (1 理工) 神奈川縣川崎町小土呂八
- 久世敏正 (5 理工) 府下千駄ヶ谷町四八五
- 大岩 寛 (7 理工延期卒業) 水戸市神崎町八七二番地
- 藤森茂男 (四一英) 市外大久保百人町一四七
- 岡田三郎 (4 國) 大阪府下西成郡十三小島大町二九二
- 小林宗重 (7 國) 四谷區本村町二六種田方
- 赤堀正英 (5 國) 京都市下京區新宮川町五條上ノ山田町
- 内田永真 (6 英) 北豐島郡岩淵町大字岩淵本宿
- 禿子諦成 (3 國) 本郷區西竹町七平野方
- 若生五郎治 (四二歷) 仙臺市二日町七四
- 濱名博綱 (3 推) 福島縣郡山町中町二六

改姓名

- 校友諸氏の改姓名左の如し。
- 小泉愛造 (6 政) 舊姓飯塚 (茨城縣久慈郡太田町金井町) 舊姓西村 (荏原郡平塚村)
- 谷口辭三郎 (三三文) 舊姓白木 (大阪市北區上福島北二丁目一六〇小池方)
- 戸越字錦ヶ先 (一〇〇) 舊姓白木 (大阪市北區上福島北二丁目一六〇小池方)
- 横地義郎 (2 大商) 舊姓塚本 (名古屋市中區中區馬場町二十二番戶)
- 山谷盛康 (2 大商) 舊名稔 (門司市内濱町三丁目大倉商事株式會社出張所勤務)
- 名手峰四郎 (7 大商) 舊姓近藤 (大阪步兵第三

- 十七聯隊第八中隊入營
- 近藤庄三 (7 理工) 舊姓岡田 (京橋區銀座三丁目三番地)
- 堀江芳一 (3 國) 舊姓加藤 (島根縣立杵築中學校教諭に轉任、同縣鏡川郡杵築町)

- 大正五年 大學部政治經濟學科出身 瀧島 季俊
- 明治二十二年 英語普通科出身 角田 正夫
- 明治二十四年 英語行政科出身 山田 鶴三
- 明治二十六年 文學科出身 野原 稻藏
- 大正三年 大學部商科出身 星野眞次郎
- 大正七年 同上 羽田常三郎
- 大正五年 同上 松本 三郎
- 明治四十五年 同上 吉川 繁治
- 大正六年 大學部理工科探礦冶金學科出身 小幡 眞
- 大正三年 同上電氣工學科出身須貝角次郎
- 明治四十年 高等師範部國語漢文科出身 藤田英太郎
- 大正六年 高等師範部理化學科出身 西村 五二
- 明治四十二年 高等師範部歷史地理科出身 鈴木 梅司

大隈侯爵紀念品贈呈資金申込芳名 (第五回報告)

- 一金壹圓宛
- 村田 榮殿 村田 貞次殿
- 村越 齋殿 村島 寬嗣殿 村瀬 李廣殿
- 村井其太郎殿 向井 兼徳殿 向山 政恕殿
- 宗 滋 殖毅 武藤 安雄殿 兔田 幸藏殿

右諸氏の計報に接し哀悼の至りに堪へず茲に謹んで用意を表す

上田	武弘殿	上田	輝雄殿	上田	景助殿
上野	利吉殿	上野	慶造殿	上柳	綠殿
梅澤	精一殿	梅澤	慎六殿	梅澤	忠治殿
梅田	素輔殿	浦	武助殿	浦野	元俊殿
内田	卯三郎殿	内田	喜雄殿	内田	邦造殿
宇佐美	占太郎殿	植野	謙次郎殿	植田	平一殿
鶴岡	重光殿	瓜生	卓爾殿	氏家	正殿
白井	榮壽殿	海原	曉雲殿	江村	正喜殿
江崎	準繩殿	遠藤	民夫殿	遠藤	喜四郎殿
遠藤	金吉殿	遠藤	太郎殿	圓城寺	松一殿
海老原	建殿	沼田	重一殿	根本	長治殿
野口	源之助殿	野口	亮殿	野口	爲義殿
野村	綱治郎殿	野村	完六殿	野島	八郎殿
野々村	良躬殿	能勢	正巳殿	工藤	祐山殿
工藤	輝輔殿	久保	猛男殿	久保田	義三殿
久保田	實宗殿	久芳	龍真殿	黑澤	昇治殿
黑澤	三代喜知殿	黑川	清殿	黑田	政吉殿
黒谷	正孝殿	黒木	耕一殿	窪田	定雄殿
窪田	茂喜殿	楠元	芳熊殿	楠田	喬殿
楠瀬	如龍殿	熊谷	彌之助殿	熊谷	梅太郎殿
草皆	久治殿	草村	松雄殿	日下	武近殿
熊田	茂次殿	栗原	島三殿	倉田	謙吉殿
下條	親雄殿	山本	稔殿	山本	憲太殿
山本	邦助殿	山本	嶽治殿	山本	芳助殿
山崎	直治殿	山崎	好知殿	山崎	幸一殿
山崎	定太郎殿	山口	武殿	山口	復三郎殿
山口	成孝殿	山口	衛殿	山下	稻三郎殿
山下	龜次殿	山田	節殿	山田	直臣殿
山林	德造殿	山室	榮作殿	山浦	武夫殿
安田	五一殿	安田	善造殿	安永	博殿
安彦	善治殿	安間	謙殿	矢代	代次殿
矢崎	豹三殿	矢永	務殿	矢崎	直次郎殿
矢島	戒謙殿	八木	辰守殿	八木	角次郎殿
八杉	貞利殿	蔵田	信吉殿	築瀬	清太殿
松本	文作殿	松本	種夫殿	松本	與七郎殿

松本	敬治殿	松田	昇一殿	松田	一殿
松田	毅殿	松田	谷三殿	松岡	則章殿
松岡	哲殿	松尾	幸一殿	松尾	榮三郎殿
松根	秀彌殿	松下	史郎殿	松野	源九郎殿
前田	孫兵衛殿	前田	久盛殿	前田	儀作殿
前澤	重雄殿	増田	乙四郎殿	増田	知吉殿
増田	傳吉殿	丸山	乾其殿	丸見	六郎殿
牧田	長三郎殿	牧野	義智殿	牧	眞言殿
正木	次郎殿	正木	新殿	正司	恕助殿
的場	無學殿	横田	司則殿	藤井	昌太殿
藤井	重三郎殿	藤井	源左衛門殿	藤井	諱道殿
藤井	卓殿	藤田	利三郎殿	藤田	幸太郎殿
藤田	末茂殿	藤田	權三郎殿	藤田	權九郎殿
藤野	亮道殿	藤野	崇正殿	藤本	守殿
藤本	民雄殿	藤原	覺三郎殿	藤山	茂彦殿
藤村	三之助殿	藤間	八藏殿	藤森	源之助殿
藤澤	孝太郎殿	福田	秀雄殿	福田	龍一殿
福田	秀太郎殿	福田	復甫殿	福田	勝治殿
福島	熊吉殿	福村	龜雄殿	福永	喜八殿
福富	正喜殿	福邑	義生殿	福武	慶作殿
古川	勝次郎殿	古川	二郎殿	古川	隼人殿
古川	不二雄殿	古橋	鋒太郎殿	古谷	順之助殿
古市	重次郎殿	古城	龜之助殿	深見	耀宏殿
深水	龍太郎殿	深澤	政介殿	船越	作一郎殿
船田	清治殿	布施	孝殿	別府	今治郎殿
小林	正勝殿	小林	頌雄殿	小林	憲年殿
小林	儀三郎殿	小林	新右衛門殿	小森	德治殿
小森	彦次殿	小泉	潤一郎殿	小泉	仲三郎殿
小寺	辰吉殿	小山	照雄殿	小山	鬼子三殿
小島	佐之次郎殿	小金	龜次郎殿	小久	江眞雄殿
小平	憲吉殿	小原	純殿	小竹	浩殿
小瀬	東二殿	小池	信吾殿	小菅	護作殿
小磯	健吉殿	兒島	六郎殿	近藤	眞吉殿
近藤	正藏殿	近藤	貴徳殿	河野	文乘殿
河野	助人殿	午來	丈助殿	甲藤	長氣殿

國分	末三殿	古賀	基殿	木樽	仙太郎殿
手島	諫一郎殿	手東	愛次郎殿	寺澤	萬三殿
寺本	喜一郎殿	鄭	奎鉞殿	安藤	金平殿
安藤	金三郎殿	安東	友哉殿	安達	賢殿
安達	弘眞殿	安達	和雄殿	安部	一男殿
安藏	吉次郎殿	安食	高尙殿	安士	秋一郎殿
芦田	伊人殿	芦田	義宣殿	阿部	章一郎殿
朝日	貫一殿	朝河	貫一殿	東	忠藏殿
東	與三二殿	東	海夫殿	秋谷	節太郎殿
秋山	重泰殿	秋本	統一殿	淺野	賢智殿
淺野	米三郎殿	淺川	萬壽雄殿	淺山	正三殿
赤坂	成允殿	赤司	佐一殿	赤木	久太郎殿
赤星	端殿	新井	半之助殿	新井	幸三郎殿
新井	次郎殿	青木	倍平殿	青木	濱之助殿
糸永	耘平殿	青木	郁三殿	青江	隆二殿
荒井	兼治郎殿	荒木	孝平殿	荒井	惟俊殿
粟村	實殿	粟村	豐太郎殿	麻津	榮藏殿
足田	秀雄殿	天海	丘四郎殿	會田	太兵衛殿
熱田	助殿	麻生	純殿	厚	東太郎殿
明戸	一郎殿	相内	助賢殿	佐藤	董殿
佐藤	德三郎殿	佐藤	昌尙殿	佐藤	魁一殿
佐藤	與一殿	佐藤	正殿	佐藤	九平治殿
佐藤	憲弘殿	佐藤	恭平殿	佐々	木清右門殿
佐々	木義山殿	佐々	木隆吉殿	佐々	木敬之殿
佐々	木文作殿	佐伯	妙智殿	佐伯	越夫殿
佐賀	七郎殿	佐羽	尾伊佐美殿	佐伯	好郎殿
佐治	敬吾殿	佐野	袈裟美殿	齋藤	捨藏殿
齋藤	佐次郎殿	齋藤	時之助殿	齋藤	英三郎殿
齋藤	泰三殿	齋藤	恒之助殿	坂口	武市殿
坂戸	嘉徳治殿	櫻井	爲十郎殿	櫻井	友造殿
櫻井	長治殿	笹垣	俊海殿	笹野	鐵太郎殿
笹内	重晴殿	定金	八惠殿	定金	右源二殿
澤守	源重郎殿	堺田	錦十郎殿	三枝	祐介殿
蔡	布昭殿	木村	直交殿	木村	誠殿
木村	豐次郎殿	木村	一郎殿	木村	芳太郎殿

木下	永二殿	木下	國明殿	木下	新吾殿
木本	精太郎殿	木島	光治殿	木津	群平殿
木谷	辰巳殿	木藤	長殿	木滑	寛殿
木内	義太郎殿	金	光泰殿	金	淵穂殿
金	鎔濟殿	北原	觀朗殿	北島	淳一郎殿
吉光	寺秀作殿	吉開	福松殿	吉良	一義殿
岸本	丑松殿	衣笠	醇殿	桐山	均一殿
鬼頭	俊造殿	暉峻	康範殿	紀野	靜雄殿
京坂	重雄殿	菊池	眞造殿	湯淺	益三郎殿
弓削	徳次殿	雪竹	麒六殿	三好	玄鶴殿
三好	眞雄殿	三浦	順一殿	三浦	榮次郎殿
三輪	吉太郎殿	三輪	留藏殿	三木	將雄殿
三木	連殿	三谷	長太郎殿	三谷	讓殿
三代	政市殿	三澤	義太郎殿	三田	村太一郎殿
三宅	淳平殿	宮	信一殿	宮崎	眞治殿
宮崎	小八郎殿	宮崎	宗孝殿	宮崎	重助殿
宮地	久雄殿	宮川	源治殿	宮内	保之助殿
宮宇	地大吉殿	宮田	佐一郎殿	宮原	友記殿
宮本	友三殿	水野	眞高殿	水城	仙二殿
南	壽殿	南方	清如殿	右田	萬作殿
右田	左武雄殿	美佐	捨治殿	美濃	輪亮殿
皆川	重義殿	清水	金八殿	清水	久造殿
清水	糺殿	清水	八郎殿	清水	慶之助殿
清水	清次郎殿	島崎	尙殿	島崎	一郎殿
島	利七殿	島川	進殿	島津	久賢殿
澁谷	三殿	澁谷	眞次郎殿	澁谷	清次郎殿
鹽田	脩吾殿	鹽川	直助殿	下川	惇殿
下斗	米耕造殿	重岡	忠三殿	重友	芳夫殿
城	達之助殿	城井	三二殿	柴田	俊夫殿
柴田	潤藏殿	芝原	實之助殿	繁野	政瑞殿
鹿田	秀夫殿	矢戸	伊八殿	白石	俊夫殿
新開	貫殿	志賀	定一殿	平野	謹可殿
平野	二郎殿	平野	登夫殿	平井	文三殿
平井	秀男殿	平賀	一藏殿	平賀	文男殿
平川	三郎殿	平田	茂樹殿	平岡	敬藏殿

廣瀨 秀圓殿 廣重 二郎殿 廣江富四郎殿
 廣野 猛逸殿 廣神定五郎殿 日野 忠吉殿
 日暮 豐殿 日種 祐邦殿 久野 三止殿
 久田久太郎殿 比村 發殿 兵頭 直明殿
 神田 三平殿 東田 茂信殿 森 繁三殿
 森 九十郎殿 森 吉三郎殿 森 貞次郎殿
 森 安吉殿 森田 八郎殿 森田得二郎殿
 森 正雄殿 森下 政一殿 森本隆太郎殿
 森川 八郎殿 森山 本一殿 守 菊次郎殿
 毛利 喜明殿 毛利 信雄殿 百瀬 善重殿
 關 寅勇殿 關 倉三郎殿 關口直太郎殿
 瀨戶 義直殿 仙臺岩太郎殿 先光 孝殿
 千田 精一殿 芹澤 進太郎殿 妹尾房次郎殿
 須藤 次郎殿 鈴木 武雄殿 鈴木 英夫殿
 鈴木長次郎殿 鈴木 誠一殿 鈴木與十郎殿
 鈴木 壽殿 鈴木喜四郎殿 鈴木 林次殿
 鈴木 世親殿 鈴木 浩之殿 鈴木 碓治殿
 鈴木 健二殿 鈴木 榮一殿 鈴木 虎三殿
 杉浦 謙吾殿 杉原 岩作殿 杉野 大吉殿
 末松健太郎殿 末澤 潤吾殿 末高 信殿
 筋瀨 德松殿 藤田重太郎殿 石澤 諭吉殿
 細谷 鏡三殿 今村勝太郎殿 村上直治郎殿
 木月軍之助殿 岩井 武雄殿 榛葉 嘉作殿
 荒木 順三殿 我謝 秀裕殿 小森 寅藏殿
 鬼澤三重郎殿 河村 敏殿 沖 作治殿
 平 準彌殿 石原 通夫殿 石橋規矩四郎殿
 矢橋 俊一殿 渡邊 秀二殿 川邊 儀助殿
 浮岳 堯勳殿 禿子 謙成殿 村本兼多郎殿
 門間 令助殿 鶴田 雄夫殿 和田悌四郎殿
 藤木 謙吉殿 寺澤 靖殿 有馬雄太郎殿
 橫前 正輔殿 金子 健八殿 木村 謙一殿
 安藤 博廣殿 大村 喜藏殿 山崎 健藏殿
 戶松 慶成殿 堀野 眞一殿 上野 唯勝殿
 鬼塚 綱彦殿 伊藤治三郎殿 上野 靜殿
 板野 利二殿 倉橋 潔殿 木村半之助殿

中川 喜義殿 小林 堅三殿 南 晴 耕殿
 藤本 慶祐殿 白石 芳留殿 木村 直交殿
 清水 泰次殿 今村 與作殿 石川 雅吉殿
 片山 利久殿 (以下次號)

●大正七年度校友會
 維持費釀出人名(第三回)

一金貳圓宛

長尾 眞平 岡崎禮太郎 岩山 勇祐
 片山 重平 平 逸平 安達 賢
 小島 保吉 坂井 正壽 宇田 隆三
 君島 風吉 野本 靜治 林 一頁
 難波 虎雄 鈴木 琢磨 館岡 幹
 川澤清太郎 赤尾茂三郎 菊池沖之助
 副島 增市 西村 正安 藤井 法潤
 川邊英之助 坂本 隆二 須賀房次郎
 白築 祐久 松浦 三平 佐藤 彌造
 長濱義太郎 能登 博 秋山 重正
 曾木 重貴 村上武三郎 甘樂辨次郎
 張谷 芳夫 堀尾治一郎 宮田佐一郎
 永田市次郎 田中 正直 坂戶嘉惣治
 平野 履道 猪原秋太郎 由井二時三郎
 吉崎 頼雄 寺澤 直人 片山 昂
 高崎 鑒 野田 茂 森 彦市
 今田德太郎 小山 晋
 正山 敏雄 長谷川信勝 川村 敬治
 岩崎 恒作 矢野出龜之助 遠藤 金吉
 竹内 銳彦 中村 健一 猿田 春景
 清水 重嗣 牧田 二郎 平瀬太郎三郎
 池田 省三 宇津木彌太郎 十川兵三郎
 山内 毅 堀 吉次郎 谷川 清一
 大谷 順作 杉井 榮雄 長坂 唯一
 春日井風藏 今井 正也 野口 清一
 村田勝之助 星島 昂一 橋井 勇吉
 久保田清太 熊澤龍太郎 佐伯 孝平

小林 光次 黒澤三代喜知 池田 祇長
 近岡忠次郎 萩原 庫吉 永久保直忠
 木村 虎雄 鈴木 重孝 小野 啓二
 牧 隼人 上代 續 藤得 東作
 原 誠助 笠井 宗一 眞田 亘
 内田源兵衛 小田原 勇 佐藤 祖道
 岩腰 憲夫 會田太兵衛 石塚 與八
 中野子德太郎 大手利八郎 磯部 重造
 挾間 千年 米良 立雄 友杉滿壽郎
 伊藤 直司 藤井 政八 大内孫次郎
 青木 信藏 濱 惣重 岡田彌一郎
 大關誠一郎 島中 敬一 島田 隆次
 中野千太郎 林 純一郎 鈴木吉兵衛
 井上 重治 本多 四郎 清水 武雄
 武田 環 大見 忠義 中山 豐三
 戸川 虎雄 野崎 貞敏 森永 彦二
 古賀 基 種田 政德 松岡 哲
 石井 眞一 福田 勝弘 入江 清之
 齊田 安一 井手 七郎 中村元二郎
 佐々木 毅 山本 爲治 前田 久盛
 林 末三郎 井上賢太郎 松原淳太郎
 中村他家次郎 藤屋鐵太郎 大村 隆行
 竹下 文隆 箱野葵三郎 新名 直和
 平井 義陽 元島 善三 中村 寧
 島崎 俊介 村田秀太郎 掛川 良策
 二條 源導 蒲生 洽郷 田中 敬吉
 石川 政雄 中村英次郎 古谷順之助
 新谷眞次郎 藤原 亮快 小川 貞治
 林 隆興 吉成 竹治 平山 忠善
 磯崎 康範 阿南 卓 秋元勇一郎
 氏家 文夫 東角井順臣 戸田 常次
 齋藤 一郎 深井 延 小林房之助
 山本剛三郎 岡崎 守藏 藤原 鐵乘
 中宮 肇 岸 龜 藤原 末吉
 門馬 長雄 工藤與次郎 上肥 政勝

今村藤次郎 小池 榮 小泉 政江
 鹽田 達男 大久保德太郎 古瀨 正勝
 竹内 省三 藤井 浩然 和田 義公
 根本耕太郎 花岡健之助 吉田 三市
 來住 靜一 中野 潔 伊藤 孫作
 岡本 信郎 飯野 清重 柳田 鐵三
 中村 卯八 中野傳三郎 近松 尊了
 別府俊一郎 古川 二郎 佐藤 恭雄
 椎名儀一郎 細田房太郎 内山重一郎
 雨宮 景治 渡邊 憲 藤村三之助
 山崎 欽祐 青柳郁次郎 坂本 賢
 正木 新 濱田 佳澄 盧 炳 瑞
 栗原 馨三 大野 恭平 藤田兵次郎
 崎濱 秀主 中島 新一 齋藤 豐治
 杉村 正吉 仙石 久直 鷹野 三郎
 市村 峯雄 露口 爲市 玉置 英三
 成井 敏雄 松井 從夫 中川 貞治
 中島 令次 田淵 義一 山川 俊作
 宮崎 富衛 山崎 喜作 西平 賀莊
 後藤 政平 吉村 正人 關 淺吉
 大西 顯純 山下 幾藏 平野 徳治
 奧本 義實 片山 三郎 工藤勝太郎
 有江金太郎 牛尾 英二 福田 由治
 矢代 代次 藥田 秀一 森田利一郎
 大原 敷 井出 義作 鈴木 敏一
 春海 浩平 宮地 幸雄 横田 司朗
 荒木 智懂 稻垣泰之助 勝山 達夫
 林 善次 吉田與三郎 樋野 穰
 佐々木 順 藤本 武重 吉井 要人
 小平 徳松 湊谷定次郎 前原 貞顯
 武田 信一 大河内隆弘 高田 重一
 横井 俊學 網島 寅治 岸田 菅二
 山田 直 戸松 慶成 永田銀次郎
 荒井善一郎 西原 仲次 遠山 一尾
 大館 憲章 水室 龜治 久保田喜和太

宮川 賢造	塚原 徹	西村 忠一	黑河内義夫	篠塚 清	荒谷 夷一	甲斐原益三	一色 順雄	甲斐 芳造	山尾 準一	本郷 良吉	藤田 平逸
江村 正喜	佐藤 毅	吉村 四方海	氏家 寛助	堀内 輝重	山本 三機	正司 恕助	大野喜代三	野崎 吉次	近藤 正藏	入江 郁夫	渡邊 勉
大矢 史朗	梅野 滿雄	藤 達岸	伊藤 米治	寺澤 萬三	諸井 光政	野澤 卯市	平賀 文男	室 源三郎	多賀 叔男	瀨尾嘉五郎	加藤太三郎
和中虎十郎	岩永 重華	西 守	美濃輪 亮	中村 茂松	須田 武雄	河瀬 道承	下島 平治	金光 國開	能勢 鬼一	大久保理事	堤 淨祐
永井恭四郎	金子 本作	眞島 精策	谷 徹六	大江富太郎	瀧 國雄	津原 淨勝	杉山 六郎	池田信太郎	佐藤東一郎	中村 輝喜	竹村豐太郎
石田 善佐	加藤 茂正	荒井 三藏	菊井季太郎	新田 源一	岸本 丑松	杉田 英次	加藤 嘉彦	新海哲之助	堀安萬喜太	瀨尾 庸七	龜井 靜雄
山口 倫一	遠藤重四郎	中村 孝一	奥田 新	兒島 御造	岩崎 柳三	新田 弘之	三輪 信子	矢野 剛	三谷 清一	堀 貞	彦田 絹二
櫛田 正一	岩井力三郎	宇島 寛	井野 豊一	鶴澤 治雄	清水 定勝	澁谷 貞次	野村 重治	野口勘三郎	川北 磯助	長谷川孝太郎	小松熊太郎
鈴木 世親	柴 長衛	田所 繁治	細野 光利	古川 隼人	鍋島諒三郎	原 重文	毛受 哲	澁谷 甲三	村上 道保	宇野 名翠	佐藤 信一
金丸親太郎	江田 米太	西川 慶三	上田 秀道	長谷部隆諦	武智 久源	木寺安五郎	服部鐵次郎	武谷 兼信	母衣地直平	内藤 正廣	橋本 忠造
山本 四男	日戸 傳章	榎田 保	宮内保之進	長崎 治郎	伊藤 尙	谷 哲二	兒玉 勝一	室谷 祐善	廣江富四郎	幡谷仙三郎	内田卯三郎
上條 榮	黒崎 増司	岩城 俊藏	八木 通重	大塚 齊	大峰 光彌	渡邊勝太郎	近藤佐五郎	林 庸太郎	五月女喜一郎	根津繁三郎	吉村 徳吉
石川九後太郎	横倉 幹茂	野尻 正英	高橋 正雄	井上賢太郎	菊部 茂一	大津留 博	間瀬才治郎	田中 豊	栗田 正治	大塚三男吉	土屋 充
吉村 鎮雄	奥田 雲藏	大久保助一郎	石原 通夫	木村 達彦	平山 恒	中村憲太郎	濱島 傳吉	松田 一	中村純一郎	橋本富三郎	小河 秀市
藤田權九郎	藤井 泰三	大藤 豊	山内 忠文	森 直道	飯野 五郎	串本友三郎	原田梁二郎	野田龍三郎	鶴田 雅顯	渡瀬 保治	佐藤 延吉
三田村平太郎	小野 芳彦	五泉 賢三	木村 誠	森山 政一	奥谷 爲治	入谷 哲平	木下 貫治	三島 藤太	濱 元城	朝倉 忠景	矢永 務
金 性 洙	兼坂 常	圓城寺榮亮	清水 清	里上龜久壽	甲斐 國男	伊東 磐根	沼田 重一	清瀧 知龍	末松健太郎	廣川 俊作	石井駒次郎
松田 正三	天滿善次郎	矢富 宗介	野田 襄	壺井 忠雄	上田 確郎	松永 功	淺岡 齊	金城 順實	兼子 洋平	濱田啓三郎	上田 榮朗
太田啓三郎	佐々木 涼	北川原 詔	石川 六郎	連水 梓	雲雀與太郎	栗原 靜造	高柳 二郎	高橋 揆一	志村朝次郎	高梨 正三	仁王頭辰二
岡村 吉平	塚越 菊治	津田 匠	小松九郎右衛門東	海夫	丸茂 忠郎	齋藤 清六	正田 運猷	大山 岩雄	嵯峨 時司	芳我守之助	松尾 孝輔
淺井熊太郎	河野 讓	石井 壽	奥村千太郎	新郷 六三	市川萬太郎	鷺尾 浩	上山 正雄	奥 秀太郎	湊 芳藏	高柳覺太郎	石塚 三郎
西村 清	小泉仲三郎	平岩照次郎	向井竹次郎	星野眞次郎	古澤 文能	加藤多喜治	藤庄右衛門	森田 孝道	高野 幸雄	平澤 一男	雨宮 敬作
相子 一郎	内山 俊治	山四郎右衛門	兒島 茂助	杉 三郎	岸本亮太郎	河野 智精	森村 導一	加藤 豊	廣井 一	笠原 照夫	原 銀藏
小林 新作	福井 章二	金澤直治郎	杉下 直枝	村上 幹二	横田 晃朴	松井 清作	小池甚一郎	後呂 信吉	岡崎 孝一	瀧本 貞一	末松 豫彦
宮下 實三	村田 秀	川口善兵衛	堀籠虎之介	彌吉 保次	田中宗太郎	養父春太郎	熊井 晴雄	岡本 千	山樺 忠興	喜久田勘太郎	喜多國護郎
松山 徳二	相田高八郎	石川 穰二	花岡 收造	井上 芳雄	清水 光義	森 市太郎	大熊字一郎	湯川 豊策	泉頭 俊造	日下田 實	小松 巧造
畔野 直助	吉田 弘次	長内 俊恭	木村 邦彦	島田 恭平	原本虎一郎	大金 丘壽	櫻内 隆藏	飯倉 千足	八杉 眞宗	黒田 五郎	大箸 篤平
板野 利二	窪川 直三	田島 信一	辻 龜太郎	遠田 孝三	淺野 兼助	横山 常次	小西 次郎	河原 文平	坂口 武市	氏原 正喜	千頭 正徳
淺田 節二	片島 幸吉	藤田源左衛門	菅沼 三彦	萩原 古壽	田代 亮	柏崎三始郎	高木 秋男	佐藤 薫	淺倉與五郎	遠藤 隆春	生和 光藏
和田 信次	神門兵右衛門	荒木英太郎	岸本 藤策	西橋 外男	澤田憲二郎	鈴木 幸夫	金尾慎太郎	梅崎 廉一	梶 磐	佐藤恒四郎	大角 幸次
原 巖	蘭田 種久	不破 彦二	光信 亨	長谷川堅治	鮮 千全	久保田繁雄	山口 龍公	岡村基四郎	高木鐵四郎	風早 乙也	大石 廉一
越山 光吉	中川 清平	安藤 正雄	丸見 六郎	湯淺 俊雄	小針 六郎	武藤 棟次	味野 重助	松田權右衛門	水野 菊一	水野 鑑聖	青山鐵治郎
板倉菊次郎	谷奥 利吉	吉田 淳	磯田兵右衛門	加藤 豊	赤羽 明治	山本 利正	近藤 正之	阪本 治郎	早野 兵藏	小野日朝治	竹本 清周
齋藤 彌彦	牧元 靜衛	高野 健介	黒木要太郎	我喜屋宗信	岡橋芳太郎	大田垣藤太	生駒勘左衛門	音成 繁雄	梁田 政藏	淺山 正三	松本 幾太
細田 民樹	速水鐵次郎	小関 吉彌	永里 吉光	吹澤 健吉	武藤 一雄				濱中 謙一	今井 五六	大西仁壽郎

岩尾 敏徳	富岡 真夫	兒玉 勇
伊藤慶太郎	松本嘉知三	大久保雄四郎
古賀 楠六	堀切善次郎	浦島保太郎
芳原 慶壽	松浦 精一	中川竹太郎
島崎恒五郎	山村 五郎	藤井 秀一
鈴木要太郎	島山 憲藏	佐藤 與一
田部井市助	稻葉 慎三	外山 武
渡邊 世郷	山谷 稔	見目 清
矢口長右衛門	山崎 巖	丹後 幹治
佐々木秀綱	見上 清一	白井伊三郎
寺本喜一郎	跡部 慎藏	中村 事
見矢 龍定	桑原 庸雄	米 知徳
内海 安城	金子 廣作	松岡恒太郎
早川 友二	山本 邦助	米田 穰
西 孝太郎	稻葉 紹瑛	赤羽 季吉
高橋 信茂	鶴田 大務	河添行一郎
望月 恒造	張徳 秀	山本 紘三
伊勢田 剛	保坂 潤治	海野 幸彦
松井 直次	吉良 憲	長坂 友藏
西田 壽吉	中島英一郎	平田 讓衛
井手時太郎	原 萬一郎	樋口 兼斎
川崎 稔	眞板欽一郎	横山 包隆
洲崎 義郎	朝倉 文治	川瀬 四郎
高見與一郎	松井 郡治	小野 直彦
岡藤 源藏	市川 徹	並河龜太郎
宇野 俊藏	吉田 虎八	藤田 榮助
瀧 桑吉	荒川房次郎	荒居 雄幹
下村庄太郎	谷村一太郎	島海 友藏
松原 三郎	三浦 俊彦	安積 勝三
山川 英藏	大野徳太郎	中川太一郎
湯本五郎治	島田兵一郎	馬場 榮喜
松澤 知司	高山 慎吾	宮崎 石大
田中 一男	中橋彌三郎	梶本富太郎
高山 郁乎	比村 發	綾部武藏郎
宮下鉄太郎	藤田重太郎	田中初太郎

奥山敬太郎	岡田 三郎	甲斐莊補鏡
花岡平三郎	佐々木千秀	和泉 久三
市島 友松	桐原 信吉	猪早不二雄
粟谷 毅	村本繁多郎	齋藤健次郎
西村 繁	永井 恭太	瀧澤 敬也
新藤光五郎	荒井 政重	大畑 定一
宮本 友三	川原 光次	福武 慶作
武井喜十郎	清水久太郎	高津源三郎
畑 利平	田村 肇	笹垣 俊海
岡野源三郎	赤堀 正英	日比野掬治
武内 一真	錦光山宗兵衛	早川 榮吉
鏑木 宮次	諸戸 精太	杉本 忠道
村井 泰造	江草 頼多	後藤 忠義
横山 樹成	山口 健造	泉田 利宗
鼓 甲子郎	北島 幸雄	富安 徳司
齋藤 正治	神谷 文平	土居 哲夫
横田保兵衛	和田富治郎	石橋 用次
中澤才次郎	馬淵 澄吉	佐野 貞助
二宮 信芳	長澤 健藏	矢島 榮助
鍵富岩三郎	河野 功	阿部 直造
右近 和作	中山 宗城	中野 半六
田中 忠治	奥谷常次郎	伏見 忠七
渡邊惣衛門	野崎 一郎	小室邦三郎
川又 孝	飯田 三郎	大東 藤吉
今村雄久馬	志和池新平	永田 正孝
小出喜八郎	道津 幸治	西崎 武
廣重 二郎	板東 陸藏	榑木 嘉郎
坂口 光三	金 良 洙	小川爲次郎
野田 虎吉	莊保 勝藏	徳元 八一
大岡平三郎	上野 行藏	榑木 壽夫
土肥 常七	神津 甚平	岸本 康通
三島三郎兵衛	川喜田久太夫	山段康之助
田口 謙藏	樋口 定七	高津仲次郎
笠間 剛	八木淳一郎	石田 重利
田倉 紋藏	西村佐兵衛	小田 徳三

末澤 潤吾	佐賀 七郎	西宗 統一
島田 勉	二木 貞利	時田 幸治
田崎 謙貞	大澤 駿二	多菊 祖一
成井 三二	井上 莞爾	岡藤 敏雄
荒井綾太郎	片岡 開	宮本 敬治
井上 要	越原 和	近藤 政行
鈴木謙太郎	石澤 直茂	高橋 廉甫
牛江 卯助	寺田 忠夫	柴田 勝二
杉原美佐雄	浮田 秀樹	松本 岸三
堀内 武夫	小野 房二	高橋 幸一
立花末次郎	日野 辰次	花田芳太郎
小西 準三	作田 義人	田中 真七
小澄 正	山崎 九市	三澤 虎一
小島 軍次	中島 幹	村上 三郎
池島 賢造	伊藤治三郎	寺田 善吉
大瀧 孝	堀内 廉一	小竹文次郎
村井 親市	吉田 次雄	三村 信一
鈴木 鐵忍	廣瀬正一郎	塚原 喜秀
川村信四郎	小泉 邦治	北村 勤
櫻井 長治	小松 茂十	鈴木 宗吉
森 經純	小川 徹龍	後藤 正司
島飼 啓藏	田口 大介	町田 勝治
田代田三郎	手島諒一郎	秋山 重恭
杉村吉之助	細井爲五郎	市川 勝次
細谷 鏡三	倉田準五郎	南方 常楠
河合 正雄	熊谷 貞次	泉 茂家
田沼富三郎	長谷川謙六	濱田 助二
黒木 久平	矢野 武一	吉川 種正
目黒 隆見	岡田 亮三	池田 藤彌
橋石 謙助	熊田 茂次	横山俊二郎
原 慧徳	杉本時三郎	小島久右衛門
長谷川彌榮	後藤林一郎	有子山夏次郎
大田 秀雄	森脇 毅	河野 伸介
井上精一郎	内田 彌八	尾原 始
磯目 運喜	鶴原梅次郎	西澤 武雄

中村 磯	宮家 美保	山崎 好知
丹吳 康平	田川 道英	兒玉 衛一
天野藤十郎	芦田 義宣	五幣誠之助
佐々木重藏	大崎二六郎	三河 彦業
中川 庄作	大原 典恒	中里 眞澄
谷口勘次郎	小竹 浩	山本外三郎
川島榮三郎	山田 真恭	内藤 鷲郎
渡邊寛一郎	住田 祥和	渡邊 寛一
吉田 是照	北岡善之助	中尾 三郎
安藤 爲司	沼田 豊	久保田正教
佐藤政右衛門	岡村 隆治	荻原憲太郎
綾部 二郎	吉岡裕治郎	林 爲夏
大木榮治郎	大庭 武市	松本 種夫
佐藤新九郎	嘉納雅次郎	本多 瀧藏
菊地仙之助	小池 傳	尾能 徳治
久佐賀義直	藤川 主英	安永 博
岩崎 重吉	長岡 正夫	横張 好真
森 龍太郎	中村 行道	野間 俊作
小林八右衛門	小林 武男	森川 太吉
小野 専介	安武千代吉	小林 親
松浦 森	小川 寅六	澤島 政平
河崎 馨	島津 忠文	北村 松丘
植木 信一	中村 孝愛	高田 春雄
目崎 剛志	武田 孝	大塚 主計
斯真田百三郎	栗村 實	中川 醇
服部 次郎	榑崎幸一郎	荒川四方太
寺内 清次	林 謙齋	佐藤 重憲
坂田 禾麿	渡邊秀太郎	加藤 正造
島山 忠久	升本 欽治	藤森 正憲
寺田 廉平	伏屋 秀夫	島澤 義忠
磯田 恭隆	名越 政堯	和合標一郎
安部與右衛門	原田 友厚	岡田 正平
桑野 確次	今村 停三	近藤又市郎
大久保義正	角 逸三	三澤 豊
佐々木次一	楠田 喬	佐々木盛輔

木下 生盛	藤澤文一郎	中田要三郎	岩部 孝	藤井 精	平木 太郎	藤田 靜雄	稻田 信次	森田茂三郎	野中 五郎	森田 彦市	宇田川貞保
上田 宗雄	大島正七郎	由谷 義治	森川知二郎	大森 榮市	中野幸太郎	佐藤九平治	平尾 康雄	辰野 政仁	守分 環二	稻村 邦郎	山林 德藏
寺尾 熊次	片岡 武男	江角 權吉	多田隈弘道	三田村信之助	鍵富 修三	佐藤 忠義	佐野 精平	遠藤喜太郎	梅津 七藏	星野甚右衛門	藏原 惟親
中山 義助	森本 滋杉	手塚 安彦	上柳 録	木村 敷太	布施 知定	口入田覺了	横尾 輝吉	三上 新次	水無瀬忠政	梶田鯉一郎	山口 彌六
辻岡 榮三	中島 武夫	堤内千代吉	藤田英太郎	相原 一雄	原 隆成	坂上 隆雄	小暮 省三	田付 寛次	的場松太郎	齋藤 未學	山本 八龍
山内 勝造	山下 一二	鈴木幾次郎	土方 民撫	八木 惠明	尾崎 三郎	西岡 基治	武智 涉	村上 邦道	原田與之助	海部 二郎	岡田正太郎
江畑 顯	和田 績	田中 貫一	伊藤停一郎	津田 鍛雄	土井 眞	北留間子郎	梅田 素輔	三木熊三郎	北川龜三郎	東 清重	福島 忠一
巽 精一	井上定次郎	木塚 半三	武内 隆英	吉田 周平	栗屋 薫	日暮 豊	平井 確郎	小林 貫一	廣川 源七	西村 義一	和田 宗武
岩永庸太郎	淺田 秀太	岩佐 喬一	中村 豐雄	安保雄四郎	堀江 芳一	廣戸 武吉	松木 弘	木島 英二	佐野 春五	遠藤 長夫	北島 利八
丸山 信次	前田 彦明	三田村甚三郎	西 清太郎	宮脇 丈八	松崎爲三郎	丸山 誠吾	齋藤 一二	吉光寺秀作	森田 八郎	吉田 敬次	對馬 尙象
原 喜一郎	太田 義隆	西澤 眞三	桂 太美夫	館岡斌太郎	森本 潔	廣瀬 秀圓	加藤 正信	正津 政夫	小川 孝祐	小川 直照	池袋 春樹
田尻憲太郎	佐藤 祥一	三好 亥鶴	御厨 善作	岩崎 君平	鬼塚 民衛	鷺尾 康寶	鶴谷 幸一	三宅 元雄	阿部松五郎	柏井 光彦	熊谷頼太郎
櫻井 久彦	泉館 家稔	山田 善博	清水徳太郎	高橋 文次	細越 温道	依田 藤衛	櫻並 充造	石橋爲之助	中島 富造	山泉 新	村田 穉吉
富田祐太郎	上遠野富之助	石川 成憲	東條 隆吾	楠田 辰藏	小川 鐵郎	矢野 義夫	黒田 立毛	南方淳次郎	山崎 瀧三	安村 眞公	今歸仁朝英
松岡 彰吉	野々山整一	松岡 則章	横瀬 乙吉	今井 五郎	小林 正義	末永 寛	島 徹郎	加藤 景福	高橋 正壽	山下 卓馬	牧野 繁好
齋藤政次郎	藤野龜太郎	守安 和一	平田圭太道	谷口 春雄	永田巳代次	實 正雄	鳥貫泰次郎	小山雅太郎	辻井 眞	熊木 清治	藏江 周輔
矢作 健	松崎猪之助	佐藤庄一郎	村田 正雄	高瀬平一郎	中橋 源吾	堀口 恒三	増尾 勝三	吉田 賢治	西本 一郎	加藤 清作	大塚清一郎
富澤覺之助	望月 寛	豊野 董輔	中井 準太	赤坂 清	田畑眞三郎	尺削 重治	村上 備夫	相馬 和雄	西本 正美	岩佐 善一	島越 正三
京谷勇次郎	辻田秀太郎	大關又次郎	十河 正平	小林 新	直村 達也	關屋 正元	濱崎 金藏	香山安之助	堀内 俊三	松井 清	山本 芳助
高橋 鈔吾	福田 梅吉	西尾 精一	神田 健一	奈良 秀治	三木 喜延	鈴木 浩一	江原 邦治	山邊 一郎	五十嵐貞次	北 六一郎	飛島金次郎
荻原 實	池田菊左衛門	神岡 文章	西田源次郎	米澤 元健	川越 喜義	宮地 又雄	阿部徳之助	岩崎 武七	安達 弘真	富田儀三郎	大橋 清一
井口 照文	大山國太郎	貝原 揆一	風間徳太郎	田端 春三	寺島 茂吉	赤坂牛之助	手塚半十郎	酒井與三郎	武内 作平	砂川 雄峻	岸本市太郎
三井 金一	荒井鏡治郎	佐羽尾伊佐美	能勢 正己	田内 盛嘉	布居 賢一	堀口 龜重	太田 俊一	黒宮 五郎	豊田 元實	小林新右衛門	櫻井文太郎
渡邊 龍聖	吉見 周治	足羽 忠道	長安 保二	植田 隆義	中川 豊春	仙波潤一郎	南 忠 照	富永 養爾	西田 茂夫	西島 源次	森 聖吉
本郷 素行	福島徳太郎	渡邊藤十郎	岡本 尙	鬼木 高之	嘉村 角輔	定金 八惠	中村豊次郎	吉村 禎三	八馬 兼介	大竹祐三郎	石渡健三郎
小山 照雄	山岸 輝雄	河原田眞太郎	今野 眞次	若菜 源作	谷 俊雄	平瀬 信吾	矢野治之助	田所 龍	朝日 厚	金子 靖	森 九十郎
鈴木堅三郎	勝井順太郎	藤井 諱道	豊田 武安	濱田 四郎	絲原 高禮	御牧 清勤	平野 隠謙	中川 喜義	徳島範太郎	柚木 角夫	林 善一郎
山田俊太郎	柳下 實	藤原 忠次	寺澤 靖	大塚 達	加藤 方吉	持丸 卓夫	山根正三郎	西村仙三郎	青木 秀彦	神戶 信一	民内茂一郎
藤井 克己	森 繁三	山中 忍海	丸山 盛雄	濱名 博綱	松岡三五郎	滿田 和	長島 信次	牧口 輝方	丹羽 正一	中村 榮作	中村 喜藏
富本 淳	津田 禮三	真木辰治郎	牧浦熊治郎	野村正一郎	國澤 秀雄	武田 俊彦	矢柴 匡雄	和田 俊嶺	川崎由三郎	記録 萬作	田中二四郎
柴田 稔	幡生 悟一	深見 耀宏	近藤 久祝	戸田 敬悦	中村彌次郎	成相 明雄	石原 亨	瓜生 龍丸	小田切全治	笠井仁三郎	岸 平
山口 景運	大川 八郎	鈴木 貫吉	西村元三郎	佐藤 貞二	金山 常雄	西方 彌八	福島 熊吉	下津 一雄	伊藤 眞吉	中村 哲藏	山田文太郎
麻生 純	大久保徳一	井上育太郎	天野 康夫	前川 孝始	藤 健輔	三鹽 熊太	寺内佛五郎	筒井清太郎	牧野 由藏	當山 孝鍋	西田幸太郎
難波 俊	鈴木 義雄	三浦 正治	和泉孫三郎	清水 通三	原 澄治	和田忠一郎	高野 武志	松島 英二	神津 眞吾	松本一太郎	川村 實
加藤 虎清	渡利 彌生	村山 快照	大原孫三郎	富田 八郎	安倍 又一						

湯谷 基三	久保木信次	坂東 琢郎
金竹 馨	齋藤 宇八	吉村與次郎
八木 英三	矢島 戒謙	吉川 巖
市橋 齋	加來 駿一	前川 正造
原 辻松	竹内順三郎	河原田稼吉
佐久間昌治	山田 宗哉	杉野 信三
本郷 武雄	佐藤 豐作	城島 實夫
深井 康邦	浪打 義也	谷口 巖
住友 觀一	石原平一郎	田村 隆一
吉田 孝信	窪田 茂喜	富永 貫一
日高猪兵衛	野崎三千太	永井新一郎
渡邊 綱夫	山角 廣義	平岡 敬藏
小林 省三	海野 茂幸	高橋 一人
岡崎綱五郎	高山 圭三	中川 清哉
竹原 得雄	渡邊 源多	宮富 賢三
簡井 頼亮	河崎 宗真	守内 義逸
石川 要	松岡 良榮	小林 憲年
高橋 豐三	中山新四郎	細谷 芳郎
加藤 貞二	松尾 元吉	堀内龜五郎
森 源吉	藤源源之助	小林 徳三
近藤 幸三	深川 忠吉	加藤榮太郎
木谷 正朔	神原 信一	東 純藏
内海 東男	山口 正雄	鶴飼 重光
田中 米次	藤井 繁一	須田 孝壽
田中 淳一	字賀 龍雄	齋藤 忠助
横手 喜正	稻佐 太吉	川島 憲治
高見澤一介	名和 長正	原 茂吉
西岡 哲夫	白井 直胤	久保徳次郎
竹内 喜七	倉持 一郎	吉儀 彪亮
棚橋喜三郎	服部 末男	永淵源三郎
高田太一郎	横田 精一	山本 義一
長谷川武智	石橋 信雄	安岡 豊
山田 定治	江野島正雄	岡久敷三郎
南方 清如	横塚 茂平	樋爪 鐵次
金子 彦三	勝其百太郎	富山 實

守 菊次郎	石井 東作	鈴木忠次郎
田上耕之助	太田義之助	恩地 信吉
上條 信	谷 次郎	本山理太郎
平澤 三郎	小高 義一	白井 達
磯部 三郎	田中 箕	井狩 重之
澁谷 哲司	小川由太郎	白井六之輔
安部 一男	備中 二郎	川口準太郎
森 清	陶山 素一	白神磯太郎
日下部八造	東 履吉	松保忠次郎
大島 國造	近藤 貴徳	瀧口 有
小見山壽海	河原幾治郎	平泉豊三郎
綾部 義一	阿部辨二郎	原 武雄
新井 純一	滿留 進	金子 巳吉
上田六二郎	藤田利三郎	清水豊太郎
上野 憲一	蛇川 丹治	今泉 正惠
小野 松彦	西田 高治	黒田 龍吉
毛利 信雄	島村 運平	下澤 金藏
寺澤 信計	藤田 稔	島海 武夫
木下 永二	内田 清一	秀島英五郎
富田 駒吉	空閑知鷺治	寺田 定治
本橋儀三郎	赤司 佐一	原 峽
平井 文三	赤松 保羅	大島 勉次
澤守源重郎	渡邊豊四郎	加藤 彦馬
丸山 肇	丸田 可平	前波 善學
木間 龜吉	西倉壽三郎	藤井健次郎
戸田 豊	井田 實治	高貴卯三郎
早川 繁夫	進藤 行雄	大原 慶一
久布白正己	古田 至隣	松崎 金藏
土屋 元作	竹谷 幹吉	久芳 龍真
末永 留吉	戸田 收	多田七之助
小川 芳邦	長谷川誠一	山中 美次
箕輪 秀華	倉光哲三郎	渡邊 半吾
下村 芳藏	星野 銀吾	藤田權三郎
多羅尾織市	前澤 重雄	稻 新一郎
海老友次郎	高林	内田順大郎

川名忠兵衛	加藤 宰治	猪又 勉三
桑江 真行	飯田 亮	深澤 増吉
葦澤 文雄	小原 政教	久須美東馬
黒河内信彌	川上 貫一	上野 清彌
高木 契園	久保 憲一	村上 恕
島山 龍若	栗林 慎二	小野嘉一郎
井上 允	伊藤 順治	尾崎 默如
太中 貞一	武田 正夫	岩井 岩城
瀧口 健治	小野 卓雄	青鹿 東
關 政治郎	平方 俊彦	田口 幹夫
加藤 正午	江崎 準繩	鈴木 新吾
松木鹿太郎	繁野 政瑠	赤石 定藏
小森 徳治	金庭 友八	久田久太郎
山本 旦	真田 直輔	長谷川儀助
稻葉要之助	鈴木 石治	吉澤 弘
秋山 忠直	久米 寛二	村上 雄吉
久保田 實	市村健三郎	東海 龍稔
仲吉 蒲	仙波良太郎	中泉 新
推木 春原	横山利三郎	新井善太郎
林 立夫	岡村 喜之	春田 登
服部 信一	大橋 薫	塚本 武一
脇 秀男	播磨 昌晟	朝日 貫一
大岩 篤治	姫野 繁則	富宅 益吉
毛利 輝義	益田 茂太	細梅 武雄
佐藤吉六郎	芹澤 進太	岡崎 茂穂
宇佐美占太郎	東 與三二	小黒 有助
成清 卯三	小熊國太郎	紺野 孟平
伊達 俊光	秦 進二	内田 益三
田邊 一雄	鈴木 白雲	山本 泰
木尾 眞純	鶴島 茂	井関 忠敏
温水 實孝	井邊 一雄	柿崎 六郎
今井 藏治	鈴村竹次郎	大村 耕造
湯淺 義雄	持田縫四郎	三谷長太郎
田中 龍男	豊田 三	佐々木高行
湯淺 新策	芳谷 彌平	公文 芹吉

岡田 萬雄	谷口富士男	相内 助賢
井上 文六	三輪 征市	谷口純一郎
渡邊 善吉	山口 龜藏	川勝 虎雄
下村熊三郎	村山 信一	矢野 俊次
川島 一男	天野 行武	片岡松三郎
大曲美太郎	田村 六郎	黒岩佐武郎
渡邊 精善	赤松 純一	森山 文吉
八十川政樹	川上 清助	中村 郁郎
渡邊 三郎	夏秋 源次	山口 吉藏
齋藤茂壽郎	内藤數次郎	東谷 文平
栗田 蕭夫	加藤 喬樹	國武猪太郎
宮川貞次郎	津村 清史	平山 智眼
佐伯 達夫	本田 千吉	丹澤 正作
三國 豊吉	久保田敬之助	福岡 雄一
赤峯貞次郎	菅原 格造	犬飼修三郎
木村 定爾	立野 庄市	加藤 求周
廣海渡源之助	小池 信吾	粟村豊太郎
松下 政藏	小松崎 清	近藤錦四郎
本間 駒吉	松本佐兵衛	加藤千代鶴
能任理佐久	杠 真雄	今井 完造
柳澤 文三	福井 庄七	園田 友咲
鹿田 秀夫	林 武義	石丸 春雄
竹田 敏泰	林 幸一	岸田惠太郎
水野 勝	吉田正三郎	成瀬 鐵藏
日笠 斐夫	安永 次郎	谷 快互
蔭山 真一	半場 平七	森田儀三郎
平井駒次郎	和智 忠男	岡崎 密乘
櫻井 辨治	梅澤 仙洲	日比野義雄
小松 忠男	島 訂	竹内 勇吉
西田 俊一	水町喜一郎	鈴木 敏一
岸原 三郎	木下豊太郎	深澤 敬明
守尾正太郎	山口 正夫	宮澤 春政
太田源左衛門	塚本憲一郎	阿久根 好
豐福 泰造	石井 孝三	近藤 博
木島 慎一	藤本 菊一	中川富太郎

岡井 宗一	木藤 長	高木 弘
高月 真	高木 正次	舟城 錦一
藤原豊三郎	鹽谷忠三郎	田伏 常助
河野 乾一	青木 正巳	助川 貞利
津浦 一成	中山 熊雄	中村喜次郎
關 芳次郎	黒川清右衛門	野口 亮
月橋 仙	松本 俊博	信太儀左衛門
出地 勇	鹽澤 正二	美佐 捨治
田中 驚象	大塚 悦三	内藤 正規
野崎 誠近	三田村鎮夫	田邊 孝之
竹内 新七	佐藤 辰衛	片岡 頼義
森 申二	井村 成次	郡山 淳
徳永右馬七	川瀬幾太郎	守 正武
田村 竹藏	石橋頼次郎	遠藤紋五郎
原 幸吉	小笠原義之	宮田 鶴嶺
豊田 義一	石井 淺吉	松尾 米作
高田 通泰	岩尾 宗三	阪田國三郎
井田信太郎	江口 貞松	木曾仙太郎
田中 智	小林 兵彌	萬所 委一
太田 定一	旗崎 直三	平田 泰吉
篠崎 士行	西岡 菊馬	笠原 十郎
竹内喜重郎	山口 新六	愛智 犬一
井上 忠太	牧田勇太郎	姫野 幸作
木村 晴光	森丘 覺平	佐藤 虎雄
田中 義一	押野 慶淨	原田 重徳
勝又敬之丞	岡村 素	香川 幸三
山本 茂治	河端 泰三	山内 千松
濱中 延吉	村上 英夫	田口 佃
松岡 敬一	村山龜一郎	駿河彌四郎
長谷川榮一郎	神保 俊	栗林 宗彦
福村 龜雄	野田英三郎	松下 國彦
依田 英一	鈴木 義一	川津 博
渡邊 昂	樽本 翼	中根 昇
足立彦五郎	太田 勉三	波磨 肇三
黒河内英二	黒瀧寅之助	藤 玄英

校友會名簿配本に就き

稟告校友各位

拜啓新年の御慶目出度申納候陳者本會名簿の儀豫て校友各位多數の御希望も有之旁昨夏幹事會に於て「いろは」順に編纂替を致候ことに決定し昨年九月上旬より着手致し舊臘御手許へ差出候通り出來上り申候然るに勿々の際姓氏の讀方に多少の違ひも可有之と被存候次年度編纂の節訂正仕度候間何卒相違の廉御指示被下度且つ讀方困難の姓氏は振假名を附し御一報相煩し度候尙職業等不判明の向も有之候に付此際可成詳細に御報道相願はれ候はゞ本懷存上候

次に本年度名簿は編纂替の爲め頁數を倍加し加ふるに紙價の暴騰、印刷費、及郵税の増加の爲昨年度に比し約二倍の經費を要し候就ては來月早々より大正八年度維持費集金人（京濱は東京集金社、地方は集金郵便）差出候間奮て御醜出相願度候右以誌上得貴意候 敬具

大正八年一月十日

早稻田大學校友會幹事

校友各位

佐藤長三郎	鬼塚 綱彦	鈴木 豐
榎木 徹三	山田 隆治	五十嵐規矩也
大槻 高藏	伊藤九郎太	村島 寛嗣
水野 正巳	伊藤五兵衛	小林 鐵二
武村 雷輔	長 龜男	米村又次郎
緒方 竹虎	寺田 清一	橋田 稻麿
河村 敏	赤木久太郎	新井半之助
鬼澤三重郎	關 宗次郎	栗山登四郎
井口 仁志	長田 善平	桑原 義一
直井 元介	小祝 武雄	森 淺雄
新田 憲弘	有吉甚太郎	
一金壹圓宛		
廣瀬 光顯	後藤 曠二	森田勇次郎
近松 勝次	遠藤 盛彌	岩堀 智道
伊東 秀壽	山本治三郎	鈴木 伊十
島崎 尙	永江 清	井上 龜六
手島榮次郎	太神 壽吉	黒川録太郎
矢崎豐太郎	水野虎之助	櫻井幸三郎
伊夫俊一	關 順一郎	木口 色彦
野村福太郎	奥田 喜藏	山下 仲藏
飯塚 新藏	釘宮 極	山本 忠俊
西村 清一	半田 義雄	笠井寛太郎
大島 親貞	村上 濱吉	丹尾磯之助
高木 岩吉	森 吉三郎	三輪 清吉
杉中 種吉	西尾 才助	菊池 謙讓
仁村 篤司	貴虎孟太郎	田中 收吉
小田井紫朗	島田延次郎	井上 雅二
深川 清英	多川 信次	森 美文
松江 房次	岡見 愼二	印牧 顯作
五代 竹夫	大場 運次	坂齋 道一
岡見 謙吉	遊佐 浩	宮崎八百吉
野口 喜一	三浦 慶	廣瀬 耕治
金子 柳藏	小竹 正	徳久 武治
小笠原助一	小林 平治	松原小一郎
高橋 章正	瀧 清	渡邊雅之助

高山 自實	鈴木治三郎	高山喜代藏
山崎 源吉	鷺津貞二郎	岡田 爲吉
木内義太郎	筑紫 昌門	長濱信太郎
野島 勝一	遠山 三郎	竹内 房治
近藤 靜郎	柏木 宗治	中島 初次
石田賢一郎	最上谷富治	永野 惠
高原 昌隆	田邊虎三郎	永田金三郎
杉 八郎	古川不二雄	津田左右吉
堀江 嘉平	巖本 莊氏	橋本牧三郎
鈴木 音次	瀨端善一郎	永谷武右衛門
森 盛一郎	繁野 珠城	石尾信太郎
中村常一郎	西山巳之助	江副 貫之
平田 職康	澤田信太郎	馬場定四郎
山崎定太郎	谷口 守雄	溜淵 政藏
小宮山 信	森 靜親	上村 進
山崎虎之助	加藤敬三郎	杉坂 源清
風間 力衛	内藤 三介	入澤 幸太
荒川 潔	關口 盛一	片吉 雄吉
鉸島 武二	萩野元太郎	圓城寺松一
荒井 鶴松	名取 夏司	井口 誠一
板橋 啓三	塚越丘二郎	横田 吉人
萩津 賢重	福田辯治郎	大橋 誠一
堀口 馨次	石田 文治	伊地知季繁
生田 七郎	水谷房次郎	菊池 寅七
兒島 富雄	瀧川榮次郎	松永 安衛
和方 温興	坂本 時雄	福田 光登
草村 有美	原田 安雄	小山 愛司
安清 正之	澁谷 三	田中 傳太
須藤 芳雄	垣見 富助	村山駒之助
山田 英吉	長澤 倉吉	光信 壽吉
岩井 清水	市川 正爾	岡部重一郎
大江乙亥門	日向 毅	中島 行麿
里見春次郎	高木守三郎	大串 三夫
都倉 義一	中田輔次郎	柿本 榮
服部 暢	船木頼之助	影山 清雄

龍口 護信	岡田 正美	小出範治郎
長谷川正光	肝付五一郎	竹上六三郎
井上 忻治	石原 謙	佐々木庄次郎
佐野 昇六	昆田文二郎	堀川 美哉
大久保林造	鈴木善三郎	木村半之助
井出 久一	梅若誠太郎	大澤 準二
濱口 麟藏	昇 直隆	矢崎 豹三
原 嘉道	久米 邦武	小山 谷藏
村井 五郎	鶴田 新藏	須藤 隆治
關野 九郎	揖斐 四郎	荻島 遠
三輪桓一郎	島田 圓成	江崎 秀雄
三雲 辰雄	山ノ井猶三	山崎梯次郎
原 富太郎	武林 亮	岡戸宗七郎
加藤福太郎	成富 儀一	廣瀬作三郎
吉岡長四郎	岡 克巳	堀谷左治郎
伊藤 彌門	三宅 隆一	中山 好次
高崎 太平	武林 專一	橋 繁三
松谷 久一	立石猪三郎	小寺 敬孝
前田 彦藏	山本恒太郎	小岩井貞夫
福知 新次	内田七郎次	田中 清治
基太村 貢	沼田 穰	春藤作之助
熱田 助	高橋 三郎	小川小三郎
中村 貫三	八橋徳次郎	岩永 祝三
吉田 精一	小鹽 美道	田阪 真雄
谷崎善三郎	増田徳三郎	野尻 藏也
岸 節造	岸 善太郎	大谷武次郎
仲田勝之助	上倉三之丞	高橋 與一
櫻井善兵衛	塚本 賢曉	北村 住吉
寺本 定芳	新倉 孝造	伊藤元治郎
田邊 良平	右田左武雄	清水 政吉
幸尾隆太郎	原口竹次郎	和田 善治
齋藤鶴三郎	野崎 貞逸	宇都宮 鼎
橋本 貞市	山名 義高	鈴木 芳樹
白南 董	鹿毛 三晋	安藤政治郎
高塚 康平	清水與七郎	大山 眞

策坂 中	白濱 知寛	古塚 正治
溝口 直枝	水野 勝一	右田 萬作
大沼龜太郎	上遠野 栗	澤村幸一郎
寺田 鏡治	小坂菊太郎	中村康之助
鬼塚長次郎	岡 成志	錦織 幹
瀧田 潔	石田 秀一	佐々木四郎
小川 重吉	吉田與一郎	松井 鐵留
鹽谷 久松	片岡 久宏	渡邊外太郎
白川 順一	青地雄太郎	大瀬甚太郎
増山外三郎	小幡 暹	遠藤 敏
三井邦太郎	松本 敬治	鷺海 忠雄
藤原 亮三	今橋 稔一	福井三郎兵衛
奥山 茂	藤田 和夫	辻本作太郎
上木 審	藤本 武雄	遊佐 慶夫
森田得二郎	高野 利人	渡邊 清
舟橋忠太郎	藤野 久雄	高橋光太郎
香田 五郎	降旗 音吉	楊井 二郎
上島 長久	向山 政恕	松村定次郎
川原田政太郎	佐野 昇	小島兒四郎
鈴木 竹治	鹽田 修吾	内藤 真助
荒井英八郎	前田 勇三	増田四一郎
中尾清太郎	氏家 齋	原 隨園
大井 美松	小澤 榮	朝倉幸一郎

(以下次號)

正誤

前號四頁一段三行目
 ▲贊助會事務主任
 とあるは
 ▲贊助會事務主任
 の誤植、又同十九行目
 ▲贊助會委員會
 とあるは
 ▲贊助會委員會
 の誤植に付茲に訂正す。

新正に際し謹んで御健康を
 祈り倍舊の御交誼を希ふ
 大正八年一月元旦
 早稻田大學

學長 平沼 淑郎
 理事 伯爵松平 頼壽
 理事 淺野 應輔
 理事 鹽澤 昌貞
 理事 田中 穂積
 幹事 前田 多藏

恭賀新年

(賀狀三代フ)
 高等師範部

松平 康國
 牧野 謙次郎
 中野 半次郎
 勝井 吉孝郎
 永井 能武
 岸本 力
 山十 嵐
 山池 三九郎
 菊井 安九郎
 宮子 馬藏
 金子 又藏
 遠藤 作三郎
 内崎 瀧藏
 高杉 五郎
 桂柳 篤十郎
 青柳 篤十郎
 梅若 誠太郎
 增田 恒郎
 中桐 確太郎
 (イロハ順)

校友諸君

普く校友諸君に檄す

謹啓益々御清穆之條奉慶賀候陳ば我早稻田大學の事業も校友諸君を始め大方の深甚なる御同情に由り逐年隆昌に赴き漸次諸般の設備を整へて有爲の士を教養し以て聊か國家に貢獻する所ありたるは欣幸不過之深く感謝に堪えざる次第に御座候

然るに時勢の進運は驟々として一日も底止するあらず從て之に順應して更に諸般の設備を改善し廣く天下の碩學を聘用して益々學界に於ける本大學の權威を發揚し更に大に人材を造就して益々國家に貢獻せんと欲するには其根本的絶對要素として經濟上の充實を期せざるべからず乃ち曩に本賛助會を設けて汎く江湖篤志家の御援助を仰ぐと同時に校友諸君子の特別なる御同情に訴へ依て以て此際本大學の經濟的基礎を確立せんとしたる次第に御座候處幸に諸君子の深厚なる御同情を蒙り申込書日に相繼ぎ發表後未だ僅に七旬を出でずして既に『校報』欄所記の如く人員五百有餘名口數一千七百餘口(大正七年十二月迄)に達するの盛況を呈し候段獨り本大學の光榮たるのみならず實に國家の爲め慶賀に堪えず深く感謝致居候次第に御座候

然るに之を本大學校友諸君の總數一萬三千有餘名に對照致候時は其比未だ廿分の一にも達せず誠に遺憾に存じ候に付未申込の諸君子此際奮つて御申込の榮を賜はり候様茲に重ねて奉悃願候 敬具

大正八年一月

早稻田大學賛助會

委員長 伯爵 松平 賴壽
 學長 法學博士 平沼 淑郎
 總長 侯爵 大隈 重信

早稻田學報 (大正八年一月)

謹告

近來郵便物の延着、不着等妙からず、當會より發送せるもの、貴着せざる場合あるのみならず、貴發せられたる申込書の往々にして當方に到着せざるものあり、爲めに高志を空うする憾なき能はず候。當會にては貴發申込書を受理すると同時に其御好意を謝する爲め直ちに謝狀發送致し居候に付自今右謝狀が相當日時に貴着せざる等の場合有之候節は乍御手數當會宛御一報被成下候様願上度此段爲念謹告仕候也

大正八年一月

早稻田大學賛助會

謹賀新年

大正八年一月

東京市麴町區永樂町二ノ一〇

永樂俱樂部

電話本局 三三八九番

定價 一部郵稅共 金拾錢

廣告料 一回一頁金參拾圓半頁金拾六圓四分ノ一頁金拾圓

大正八年一月十日印刷
 大正八年一月十日發行

編輯兼發行人 前田 多藏
 東京市牛込區榎町七番地

印刷者 渡邊 八太郎
 東京市牛込區榎町七番地

印刷所 日清印刷株式會社
 府下豐多摩郡戶塚町字下戶塚六百四十七番地

發行所 早稻田大學校友會

謹賀新年

大正八年一月一日

東京市麴町區貳丁目拾番地

日華窯業株式會社

電話本局一〇九八番

資本金貳百萬圓

營業科目

土管、耐火煉瓦、耐火モルタル、
電氣用碍子、石炭、骸炭ノ製造
販賣

本社 山東省 濟南府

工場 山東省 博山

出張所 東京丸ノ内

日清生命保險株式會社階上

取締役社長 田中唯一郎

專務取締役 中村康之助

常務取締役 渡部逸次郎

取締役 林長民

同 岩崎清七郎

同 林十次郎

同 藤波茂時郎

同 森盛一郎

同 諸井恒平

監査役 前島

同 宮邊

同 渡邊 亨毅彌